

## 〔写像〕

### 門前仲町1

「また、行方不明になった奴がいるらしい」

「これで7人目だな」

「今の時代に、神隠しじゃあるまいし」

「時代、関係あるのか？神隠しって、誰も分からないんじゃないのか？以前バミューダ海域でよく失踪事件が起きただろう、あの類じゃないか？」

「いずれ原因が分かるさ。10年後か、100年後か分かんないけどな」

「どこかの国が拉致したとか」

「もう、それはないだろう。これだけ表沙汰になってるんだから」

「うん」

「居なくなった奴って、どんな奴等なんだろうな」

「表面的なことは、新聞なんかでも分かるけど、深いところは分からないな」

「たとえば、頭がいい奴だとか、危険思想を持っている奴だとか」

「なんだ、それって」

「たしか年齢層もばらばらだし、男4人、女3人てのもあまりに普通だし」

「だけど、比較的若い奴ばかりだろう。血液型はどうだった？」

「それは、新聞には書いてなかったな」

「髪の毛の色は？」

「おい、特捜班じゃあるまいし」

「ところで、腹が減ってきたな」

「そうか？外に出るか」

「うん」

空は青。キーウエストの海の絨毯を空いっぱい広げたような一面の青だ。ふたりは天空に意識が吸い込まれてゆくような気分になってきた。

「一人目はOLだったな、27歳の」

「うん、かれこれ10ヶ月経つけど、最後に泊まった湯ヶ島の旅館の部屋にも、失踪の痕跡すら見つからなかったっていうじゃないか。なんか不気味な感じだよな」

「不気味って言えば、この間の6人目はもっと不可思議だぜ」

「ああ、あの中学生の女の子か。たしか愛子って名前だったな」

「うん。1、2分の中に消えているんだから、考えられるか。家族と一緒に飯食っていて、ふと気付いたら居ないなんて、ショックだったろうな」

「あれは絶対拉致してもんじゃないな、なんか変だ」

「昔聞いた不確定性原理みたいだな。次の瞬間、どこにいるか分からないなんて」

「だけど、素粒子の話だからな、あれは。人間はでかいし、何か考えるし、服も着ているし、それに・・・」

「人間は宇宙って謂うじゃないか。宇宙が消えた。見えなくなったってことかな」

「いつも思うんだが、消える瞬間を分かっている奴はいないんじゃないか？誰も知らない内に消えてしまうんだ。丁度、落とし物をしたような感じさ。つまり、皆が意識してない時に居なくなるってことだ。これは、居ることを気にも留めていない時ってことだけどね。俺はある本で、たしか「5次元世界のなぞ」とかいう題名のペーパーバックスだったと思うけど、ナメクジが消えるって話、読んだことあるぜ。春の日の暖かい日向で、ぼうっと小川の川辺に生えている笹の葉を見ていたとき、向こう側の川岸の笹の葉の上にいたナメクジが次第に消えていって、こちらの岸の笹の葉が引っ張られるように垂れ下がってきたと思ったら、そこにナメクジが現れたって話さ。本当にあった話として紹介されていたよ。だから、目の前で消えるっていうこともあるのかもな」

「ふーん」

「ナメクジならなんとなく分かるような気もするけど、人間がそんな風に消えるとは到底思えないな。服も着てるしな。そうだ、さっき言った中学生の子なんて、眼鏡も掛けていたしね。もしそんな風に消えるんだ

とすると、眼鏡とか服とかが後に残ったっていいんじゃないか。3番目に消えた奴は事件絡みって感じだったよな。一色単に考えていいものかどうか分からなくなるよ」

「別の殺人事件で盗難にあった車のトランクの中から、失踪したときに着ていたハーフコートが見つかったんだから、確かに不自然だ。サラリーマンだったよな。30歳くらいだった？」

「33歳さ」

「こんなに空が青いと、なんか自分も吸い込まれて消えてしまったような錯覚に陥るな」

「俺の会社、今、やばいんだ」

「え？会社？どうかしたのか？」

「うん、俺もリストラされちゃうかも知れないんだ。なにせ、効率化をこれ以上やったら会社が回らなくなるってとこまでやって、みんな疲れ切っちゃって、気力も薄れてきていて、特に技術系のやつらなんかひどいもんさ。毎日午前2時ころ帰宅するんだぜ、そして次の日の朝は、早朝ミーティングとかの名目で、7時にはデスクに居なくちゃならないんだから、身体が保つわけないさ。その結果が、出す製品、出す製品どれもこれも欠陥だらけで、その事後対策で、利益もすっ飛んでしまう始末さ。そもそも、組織の効率を凶ろうってんで、適材適所をもくろんで、組織の2/3くらいのメンバーを半期に1回ずつ人事異動させてたんだから、やっとな慣れてきたかと思ってもすぐ配転されちゃう。これじゃ良い製品出来ないさ。製造現場はもっと酷いぜ。120人いるんだけど、正社員は10人であとは契約社員と、派遣社員ばかり。同じ仕事をして給料は正社員の半分さ。よく頑張っていると思うよな。だけど生きるためにはやめられない。人のことなんてどうでもいいのさ。会社は働いている一人一人が必死に生きているなんてことは気にも留めない。まして育てようなんて気はこれっぽっちもありゃしない。担当している間に自分の部門が成果を上げれば、自分の身は安全、上のやつらはそれぞれの部門の成果を全部合わせればよくなると考えているのさ。部分最適だよ。いずれは、コラプサーだな」

「何だ？聞いたこともない言葉だな」

「縮退均衡、つまりブラックホールみたいな意味さ。組織の中で、部分最適を繰り返してゆくと、全体が崩壊に向かってゆくんだ。経営者だったらそのくらいの勉強はしておかないとな。何か問題が起きると、みんなその時は、最善の策と思って、問題の出ている部分の改善に全力投入するけど、本当はあらゆるものが関連し合っていて、相互依存しているんだ。だから、ここを変えたら、ほかのどこに影響するかを考えながら、最適化を図らなきゃ、期待しているような効果は出てこないし、逆に全体をアンバランスな方向に引っ張ってしまうんだ。もともと、組織全体が調和していて、その構成部分は相似という前提か、それぞれの部門が完全に独立していて、相互間に一切の影響はないという仮定の下での数学的な処理だから、そういう矛盾が出てくるんだ」

「ふーん、うちの社長じゃな・・・多分理解不可能！　なんだかややこしいな」

「うん、マトリクスを基にした数学的理論だよ」

「ああ、そうなんだ」

「うちの社長は営業上がりだから、技術のことなんて全然分からないんだ。だから、好き嫌い人事の極端なことをやるんだ。技術部の部長が一寸批判的な意見を言ったら、あいつらは3馬鹿トリオだなんて言って、その部長と普段気の合っている技術部の部長を3人同時に、子会社に出したり、まあ、見てられないような酷いことをやるんだ。会社が機能しなくなる訳さ。雇われ社長だから自分が担当しているときに利益を出ささえすればいいんだよ。失踪した7人のことだって、もしかしたら社会全体から出てきた結果かもしれないんだぜ。ますます分からなくなってきたな」

「3番目の奴は、竹、竹・・・うーん、そう竹下って名前だったよな。何かの事件に絡んでいるのかな」

「事件と関係あるかどうか。確かなのは、会社からの帰りに消えて、関係なさそうな殺人事件絡みの自動車のトランクから、 HALF COAT が見つかったことだけさ。それにその車はそいつが盗難にあった車だった

な。ずいぶんテレビが騒ぎ立てたからよく覚えているよ」

「おまえ、記憶力いいな」

「だけど、会社は十三だろう、竹下の車は弘前で見つかったんだぜ。それも、次の日の朝だっていうんだから、ちょっと考えられないよな」

「ところで、リストラ、危ないのか？」

「7：3だな」

「リストラが7か？」

「うん、10年近くも働いたんで、このまま行くと思っていたんだけどな。まあ、失業したら暫く、フリーターでいるつもりだよ」

「まだ、リストラされるって決まったわけじゃないし、もっと前向きに考えたほうがいいぜ」

「俺は今の仕事を続けることに、あまり強い意志はないんだ。少し方向を変えてみようかなんて、いつも思っているし」

「どこ行くの？」

大通りを横切る古い陸橋の上から祐子の声がした。祐子は急いで階段を駆け下りて来た。

「なんだ祐子か、ファミレスだよ。一緒に来るか？昼飯だ」

「ご馳走様。悪いわね。ねえ、この間行方不明になったひとのこと、知ってる？一ヶ月前の」

「うん、原って奴のことだろう。今その話をしてたときさ」

祐子は二人の間に割り込むように入って一緒に歩き始めた。

「そう、彼って、天才肌だってことよ。時々、理解しがたい行動をとることがあるらしいの。去年の夏なんか、会社のレクで指宿の海岸に行ったとき、砂浜で突然砂を掘り始めたんだって」

「それって、別に変わったことないじゃないか」

「それが、いつまでも掘っていて、何をしているのか聞いたら、「この辺りに落ちたはずだ」って言ったんだって。結局何も出てこなかったみたいだけど。周りにいた人は、何か落ちたような痕跡なんかないし、原君のことを変わった人だって思っていたらしいの。でも、それから1週間ほどして、隕石が落ちたっていうニュースを聞いたのよね、それが

不思議なことに指宿海岸の原君が掘っていた辺りらしいの。彼にそのことを言ったら、1週間計算違いをしたって言ってたらしいわ。普段はボーっとしているんだけど、一旦興味を持つと、すごい集中力なんだって。消えた日も、朝出社してから、パソコンの電源も入れずに何か考え込んでいる風だったって。昼頃になって急に思い立ったみたいにパソコンをONして、難しそうな計算式を打ち込んでいて、暫くして「できた」って言うと、いきなり電源を切って、行き先掲示板に「外出」って書いて出て行ったんだって」

「それっきりってわけなんだな」

賢が祐子の方をそっと伺うようにして言った。

「ええ。原君は時々、今の人々の考え方は、本来と逆だと言っていたみたいなの。普通、人類はこの地球上で生きていて、自分たちが生存できる環境条件は奇跡の集合だって考えるでしょう。だけど、原君が言うには人類が存在しているから、人類の存在に合った形で環境が整備されているんだって。だから、近頃地球の温暖化や、地殻変動、異常気象なんかが問題だって騒がれているけど、それは人類の意識が均一性を失って、真理から反映される現実同士の間にあまりに大きな乖離がある為、こんな異常が生じてきているって言うのよ。私にはよく分からないけど」

「どうして、原君についてそんなことまで知っているんだ？なんか怪しいぞ」

目を丸くして聞いていた数馬が、含み笑いを浮かべて言った。

「ふふふっ、どうしてだと思う？」

賢は数馬と祐子のやり取りがまるで耳に届かなかったように体を一歩前に乗り出して言った。

「ホメオパシーの理論って知っている？あれじゃないかと思うよ。毒物には一つの波動特性があって、その波動特性によって、周囲にその毒性の持つ独特な場を作るんだと思う。で、この毒物を希釈してゆくとその毒性の丁度逆位相の波動特性が現れる。だから、普通はその逆の特性で、元の毒を中和して、消し去れるんだと思うよ。つまり、毒性の実像が反

毒性の実像、つまり、毒性の虚像に変化するんだと思う。特に、ネイチャーに載っていたように、水はそこに溶け出した物質の特性を実像として写像化する場合と、虚像として写像化する場合があるってことさ。実像化する場合は現実に影響を与えるけど、虚像化する場合は何も起きない。すごいよな、まるで顕微鏡の世界だ。一度花粉観に聞いてみようかな。あいつなら何か知っていそうだしな。実像と、虚像に悩まされる訳だ。言ってみれば現代は虚実混交の時代なんじゃないかな

「それ、分かんない・・・原君って、数学にすごく強かったみたいよ。賢くんと似ているわね。よく、隣の席の人に、文房具なんかを指して、「こいつは三角関数で謂うと、サインなにがしのこれこれ乗掛けるコサインなにがしなんだよ」なんて言ってたみたいよ。周りの人も、悪いと思って、「ふーん、そーなんだ」なんて相槌を打ってたみたい」  
祐子が賢のことだけを取り上げたので、やや不機嫌そうに数馬が言った。

「そういうのって、聞いてるだけで疲れるんだよな」

「私って割と、そういうの好きなのよね。だから友達・・・あ、そう、原君の会社に友達が勤めているんだけど・・・時々手紙をくれるのよ。私も一度原君に会ってみたいって思っていた矢先の失踪だったわ」

「なんだ、そうだったのか」

「おっと、ファミレスだ」

3人は大通りに面した窓際の円卓状の席に案内された。ウエイトレスがハンディターミナルを手に注文を取りに来た。ファミリーレストランではあまり見かけない、落ち着いた感じの女性だ。

「いらっしやいませ。とても静かな日ですね。何になさいますか？」  
それだけ言うと、ウエイトレスはわずかに微笑んだ。祐子の脳裏を、ふとモナリザの微笑みが掠めた。

「私、チーズハンバーグ定食」

「いつもハンバーグだな。俺はマルゲリータピザ」

「いつもピザだな。俺は日替わり定食。今日は何？」

「牡蛎フライでございます」

賢は会釈をして答える彼女の姿に、幼い頃に抱かれた母の懐かしさを覚え、ふと、どこかで遇ったことがあると思ったが、思い出せなかった。

「じゃそれ」

「そのほかご注文はございますか？お飲物はいかがですか？」

「コーヒー、食後に、3人前。それだけ」

「かしこまりました」

ウエイトレスが静かに厨房の方に戻って行き、一度3人の方を振り返ってから厨房に消えた。祐子が言った。

「5人目の人、確か・・・空港で・・・」

「ちょっと待てよ、4次元のことを少し考えてみたほうが分かりやすいぜ。4次元になると時間と、空間が固定されなくなるはずだな」

数馬が祐子を遮って言った。賢は数馬の4次元という言葉に身体を乗り出して直ぐに応じた。

「そういうことになる」

「ということはここに居て、あそこに居るのと同じになるな」

「そうだな。だから、自分の意志で遠隔地のものを操作できるってことだ」

「そうなの？」

「意識の底は共通基盤に繋がっているって謂うだろう。だから、意識から空間を取り去ると相手も自分も共通意識の場で、すべて認識できるんじゃないのか？元々、この3次元の世界は4次元、いや、もっと高次元のフォログラフィックな事象の投影で出来ていると思うし。この世界はエネルギーの造り出している世界だと思う。もともと無の状態からこの現象界のような有の世界が現れるためには同時に負の世界が出現していなくては矛盾するだろう。だから、エネルギーには正と負の両方があると思うんだ。正のエネルギーは3次元的に現れると熱となり、光となり、力となり、如いては物となるんだ。これは簡単だけどね。負のエネルギーは3次元的にはどうなるか分かるか？」

「エネルギーの欠乏？エネルギー不足？でしょう」

「いや、エネルギーの吸引力ってやつじゃないか？」

「ふつうそう考えちゃうよね。そういうのは、エネルギーの方向が違うだけじゃないのかな。負のエネルギーは3次元の現象界には現れないと思うんだ。だって、エネルギーは速度の二乗と質量を掛け算した値だろう。それを可視化するという事は、数学的には微分することだと思うから、負のエネルギーは虚空間の中のエネルギーになると思うんだ。つまり、エネルギーは4次元複素空間の事象で、3次元的にはそれが投影されているだけということだと思うんだ」

「つまり、複素空間にある3次元現象界に出現したエネルギーで出来ているものが負になると、この世界から消えるってことか」

「そういうことになると思うぜ」

「それで、その5人目の人のことだけど、今の話を地で行くような例じゃないかしら」

「何人かの人が見ていたんだものな。あり得るかな。目の前で消えてゆくなんで」

「確かその場に居たのは7人ばかりだったって、どこかのメディアが言ってたな」

「でも、誰も彼のこと意識していなかったっていうじゃない。だから本当に消えたかどうか分からないわよ」

「うーん」

3人は、暫く無言の状態を考え込んでいるようだった。しかし、中空を見つめてじっと動かずにいる3人の姿は、ただ、ぼーっとしているだけのようでもあった。

「お待たせしました」

ウェイトレスが食事を持って来た。移動式のワゴンの上のメインディッシュとライスの皿合計5枚が注文通り3人の前に置かれた。色白な23、4歳の女性だ。

「よく覚えていられるな。俺なんかとても真似できないぜ」

「いや、その気になればできるさ。意識を目覚めさせていれば」

「スーパー記憶術ってやつか？」

「ちょっと違うと思うけど、似たようなもんさ。俺たちのほとんどは、

目が覚めていても意識は寝ているっていうぜ。その意識を目醒めさせれば、何でも記憶しておけるらしいぜ。意識してやろうとすると、かなり難しいけどな」

「ふーん。数馬君はどう？そういうことできる？」

「いや、無理だな。時々、仕事に集中している時そんな感じになることあるけどな」

「俺は時々、そんな風になるぜ。特にここ2、3日は変に冴えているみたいだ」

「ふーん、それって、意識的にできるのか？」

「いや、自然になるみたいだ」

「確かにそんなことあるわね。妙に冴えている時って」

「で、5番目の奴が消えた時、7人とも彼を見ていなかったってことか？」

数馬がピザを一切れ摘んで無理やり口に押し込んだ。

「だから、意識してなかったんじゃないかって思うわけ」

「一人もか？」

口をもぐもぐさせながら数馬が祐子の方を上目使いで見た。

「いや、案外そんなもんさ。意識なきや、聞いて聞こえず、見て見えず、食してその味わいを知らずさ」

賢が呟くように言った。

「でも、彼を入れて8人は友達同士だったんでしょ」

「彼らの話じゃ、彼だけが会話の外に居たって。3人と4人が密で雑談していて、彼だけが何か考え事をしていたんじゃないかって。みんなの意識の中に無かったんじゃないかな。空港に集まったときは確かに居たって。で、チェックインを待っている列の中にも確かに居た。だけど、代表の奴がチェックインカウンターでメンバーを確認したら、彼だけ居なかった。普通、トイレかどこかに行ったんじゃないかって考えるよな。よくあることさ」

「だけど、その時から彼は消えてた」

「それで、彼以外の人たちは、飛行機に乗ったの？」

「いや、結局旅行は取り止めになったみたいだ。結果的にね」

「みんなそれぞれに憤慨したり心配したりして、彼を捜したらしいんだけど、結局どこにも居なかったって訳」

「それは確かに不思議よね」

「でも、居なくなるところを見ていた訳じゃない」

「それが、さっき言ってた4次元複素空間の現象界からの消滅とどう関係するの？」

「何かの意志が働いた可能性があると思わないか？仲間が言うには、前の日彼は何か変な戦慄を感じていたらしい。あの日も彼はどこか遠くを見つめているような感じだったって。それで、誰かか何かの意志で、この時空間への投影を変えられたんじゃないかって思ったわけさ。ちょっと突飛な発想かな」

「ちょっと苦しいけど、まあ、あり得ないこともないかな。誰かの意志で、自分の意志とは違うことが、自分の身に起こるなんてちょっと不気味な感じがするわね」

3人が席に着いて直ぐ、レストランに面した大通りには、白いワゴン車が音もなく通り過ぎて行ったが、その後は車の影も、人の姿も、また風の気配さえもなくなった。

「そういう時は何か変な感じがするのかな」

「そうね、きっとすると思うわ」

賢が大通りの方向を眺めながら、呟くように言った。

「実は、俺もここ数日、何となく変な感じで、気になってな。普段の感覚と違って、ぼーっとしているようなんだけど、思考が止まって妙に意識が冴え渡っていて、夜中も寝ていないような感じなんだ。何かをじっと見ていると、その見ている自分分かるような感じで、見ていた物の形や、色なんかははっきり記憶に残っているんだ。それに焦点が合わないというか、見る物によって、ぼーっとしていたり、眩しくて目を細めなくちゃいられなかったり」

「そうか、それで時々目をパチパチさせているんだ」

「うん、数馬のことは普通に見えるのに、祐子は眩しくて見にくいんだ」

「なぜ？」

「何故か知らない。今日は特にひどい。今も君を見てられない」

「いやね、あなあやして思われちゃうわよ」

「俺たち以外に誰も居ないから大丈夫。ウエイトレスも、あっちにいるし」

先ほどのウエイトレスの姿は何処にも見えなかった。3人は彼女が厨房に入っていると思った。テーブル席からは薄暗く感じられる厨房への通路しか見えなかった。賢は突然両手で目を覆って呟くように言った。

「祐子、君の姿が眩しくて見えない。どうも、意識が……ちょっと顔を洗って来るよ」

賢はふたりを見つめるようにしながら席を立った。

「どうしたのかしら？大丈夫かな？」

「どうして祐子だけが眩しいんだろうな。俺とどこか違うのかな」

「賢くん、眩しい物と、ぼーっとして見にくい物があるって言ってたわよ。服の色の所為かな？」

祐子は自分の身に着けている薄地でピンクのブラウスを見回しながら言った。やがてふたりは不安を抱きながら食事を終えた。ふと気付くと、ウエイトレスがコーヒーを盆に乗せて立っている。

「コーヒーでございます。お連れのお客様の分もお持ち致しましたが」

「うん、大丈夫。ありがとう」

ウエイトレスはコーヒーを置くと静かに立ち去った。その姿は歩くというより、まるでフローアを滑ってでもいるかのように滑らかだった。食事をしながら祐子が心配そうに言った。

「賢くん遅いわね」

「飯が冷めちゃうな、コーヒーも」

「気分でも悪いのかしら。ねえ、数馬君少し見て来て」

「うん」

数馬は洗面所を覗いてみたが、賢の姿は見あたらなかった。トイレは紳士用、婦人用とも扉が開いていた。入り口から外に出て辺りを見回したが、やはり分からなかった。テーブルに戻った数馬は息を弾ませながら

言った。

「何処にも居ないよ。妙だな」

「どうしたのかしら？」

祐子は窓に顔を近づけて大通り沿いの歩道を見回した。しかし、賢の姿は何処にも無い。数馬は急いでコーヒーを飲み干すと、計算書を手にして、レジに向かった。祐子も急いで数馬を追った。レジには別のウエイトレスが立っていた。

「ごちそうさま。すみません、仲間が見えなくなりましたが、誰か外に出なかったのでしょうか？」

「いえ、お客様意外にいらっしゃいませんし、先ほど、お連れの方がお手洗いに行かれたようですが・・・どなたも外には出られていないと思いますが・・・」

数馬はふと、「この金額覚えておかなければ」と思った。そして、浮かんできたそんな考えを嫌って、頭を小さく左右に振った。支払いを済ますと、ふたりはレストランの近辺を3度往復して賢を探した。探したと言っても、コンクリートで舗装されている駐車場と大通りに沿った歩道を巡って、店の中を覗いてみたりしただけだが、それ以外に探す術はなかった。

「やっぱり何処にも居ないな」

「変ね、もしかしたら急用でアパートに帰っているかもしれないわね。戻ってこない？私も一緒に行くわ」

「うん」

賢は数馬と同じアパートに住んでいる。祐子と数馬は焦燥感に似た気持ちを抑えながら足早に歩いた。歩きながら自分たちに起きていることを確かめでもするかのように互いに話し掛けた。

「今、失踪の話をしていたばかりなのに、どうして・・・」

「分からないな。あいつ、なんか変だったな。全く話していた通りになっちゃったみたいだ」

「兎に角、急いで行ってみよう」

彼等のアパートは木造2階建てで、外装はモルタル仕上げの上にグレーの

塗装を施した、あまり目立たない建物だ。ふたりは東の側面にある錆びた鉄骨の階段を駆け上がると、賢の部屋の扉をノックした。扉には鍵が掛かったままだった。

「戻ってないみたいね。おかしいわね。賢くんスマホ持ってないし」  
祐子の顔に焦燥感が表れてきた。

「残念ながら。いつも、買えって言ってたんだけど、鬱陶しいって言ってな。もう一度ファミレスの付近を捜してみようか？」

「数馬君そうして。私は賢くんがよく行くところに行ってみるわ。何か分かったら、私のスマホに電話して」

「うん」

数馬はそれが何処かとも聞かなかった。ふたりは別かれて、それぞれの目的地に向かった。数馬はレストランの近くを、ガソリンスタンドのサービスマン、コンビニの店員と、店舗の中まで入って賢の消息を聞いて廻ったが、何の手掛かりも見いだせなかった。

祐子は隅田川の畔に出た。何故か、ここに引き付けられるような気がした。初めて賢に出会った場所だ。あの時、隅田川に向かってじっと佇んでいる賢の姿がとても荘厳に感じられた。周りに何人かの人が居たと思うが、賢だけが映像として現前し、他の人々のことははっきり記憶に残っていない。確か自分の胸の鼓動が高まり、顔が紅潮していったのを覚えている。後ろ姿だったから、特に外観の印象ではなかったはずだが、自分でも不思議に感じる瞬間だった。祐子はこの場所が今回の不可解な出来事と関係があるような気がしてならなかった。隅田川は水面に映った対岸のビルの影をゆらゆら揺らせていて、まるで流れなどないようだ。ふと時計を見ると2時を少し回っていた。水鳥が2羽、互い違いに水面を滑空していた。祐子は思わず川に向かって賢の名を呼んだ。日差しは一段とその輝きを増してきているようだった。もう一度呼んでみた。吹き来る風に乗って、祐子の澄んだ声は音楽の一節のような響きを作り出した。祐子の目に涙が浮かんできた。感情が込み上げてきて、涙が頬を滑り落ちて行った。賢が自分の手の届かないところに行ってしまったような感覚に襲われた。祐子は暫く石積みの上に腰掛けて、向こう

岸を眺めていた。遊歩道は川の淵に沿っていて、そこからは空と隅田川とを一望の下に眺めることができた。ふと気付くと、一人の老人が柵に身を預け、川に向かって身体を突き出していた。老人の額に刻まれた深い皺は、祐子にローマ時代の哲学者の像を見ているような印象を与えた。波が岩肌当たって砕け、飛沫とともに弾けるように跳ね返っている。まるで海の波のようである。老人は飛沫の落ちる水面を見ているようだった。祐子はその姿に惹き付けられた。柵に沿った縁には釣り人が残して行った纏れた釣り糸や、干からびた小魚、多分イソメが入っていた砂利袋などが散乱していた。老人は赤いズボンと黄色いシャツを身に着けていた。祐子はこれまで年寄りがそんな色の衣服を着ているのを見たことがなかったので、奇妙な感じに思えた。老人はじっと川面を見つめたまま動かなかった。そのとき一人の10歳前後の少年が、釣竿を片手に老人に近付いて来ると、老人の背後から話し掛けた。

「おじいちゃん、魚いそう？」

老人は答えなかった。少年は特に返事を求めるでもなく、そのまま川下に向かって歩いて行った。少年の姿が20メートルも離れた頃、老人はぼつんと言った。いや、応えたと言った方が正しいのかもしれない。

「魚、一杯いるよ。今、こっちに向かって一群が来るよ」

10秒程経ってからの応答だった。祐子はふと、話し掛けてみようと思った。右手の甲で涙を拭くと、意識して静かな声で言った。

「すみません、こちらにはよく来られるのですか？」

「いや、今日はここが入り口なんだ」

「初めてなんですか？お見かけ致しませんが？」

「いや、みんなを知っているよ。君のことも」

祐子は驚いて老人の顔を見た。深く刻まれた皺の下に細い澄んだ瞳が見えた。見ている内に、その顔が少年の顔のように思えてきた。

「どうして私のこと知っているのですか？」

「前から知っているよ。賢のことで胸が8割方満たされているな。もう少しだな。すぐ見つかるさ。元の場所に戻った方がいい」

「えっ！」

祐子は心臓の鼓動が一層激しくなってくるのを感じながら尋ねた。

「どうして分かるの？」

「君が此処にいるからだよ」

そう言う老人は、また、川面に視線を戻した。祐子の頭に「きっと自分が賢の名前を呼んでいたからだ」という考えが浮かんだが、「もしかしたら、老人は全て見抜いているのかも知れない」と思い直し、今朝出掛けにパジャマや、下着をベッドの上に放り投げて飛び出して来たのを思い出して、顔が紅潮してくるのを覚えた。朝は忙しかった。仕事に出掛ける前に、数馬から電話が掛かってきたからだ。食事もしないで飛び出した。会社の朝のミーティングには何とか間に合ったが、既に全員集まっていて、会議室に後から入って行くのが何とも極まりが悪かった。皆一斉に祐子の方を振り向いた。伏し目がちに、小声で「すみません」と言いながらも、「開始時間に間に合ったんだからいいでしょ」と心の中で言い訳していた。そんなことも、見抜かれていたのかと思い、ふとわれに返って老人の方を見ると、もう老人の姿は無かった。ほんの1、2分の間だった。周りを見回してみたが、老人はどこにも居ない。祐子が川岸を離れ遊歩道に沿って走っている道路に戻ると、坂に掛かるカーブを上り詰めた橋の付近の路上に、一人の少年が寝転んで日光浴をしていた。そこは車の多く行き交う交差点の付近だった。

「あっ」

祐子は思わず叫んだ。先ほどの老人が居た。少年の手を引っ張って、起き上がらせようとしている。

「お前、そんなところに寝転んで、向こうから来る車に轢かれちゃうぞ」

「あいおおう、あいおおう」

少年は必死に抵抗している。どうやら、大丈夫と言いたいようだ。川面を掠めて吹き抜ける風の音は次第に薄れ、自動車のタイヤの回転音に掻き消されるほどだ。最近の車はエンジン音がしない。確かに意識していないと危ない。祐子は老人に手を貸して、何とか少年を車の通らない土手の方まで連れて行った。少年は祐子の手を振り解くと、すぐに土手の上に戻って寝そべった。

「らいろうぶ」

祐子はもう一度レストランに戻ってみようと考えた。そのとき、スマホが鳴った。

「もしもし」

「祐子、何か分かったか？」

「ううん」

「こっちも賢のことは分からなかったけど、あのファミレスのウエイトレスもいなくなったんだって。丁度あの時だよ。なんか変じゃないか？」

「ええっ？」

祐子は再び鼓動が激しくなるのを覚えた。今度の鼓動はより一層胸の不安をかき立てた。ふと、初めての出会いの時に賢の言った言葉が蘇ってきた。遠くをじっと眺めていて動かなかった賢が、祐子が2、3メートルの近くまで来た時、不意に振り向いて、「やはり来てくれたんだ。ここで会えるような気がしていた。内観賢です」と言い、握手を促すように右手を差し出したのだった。祐子は何が何だか分からず、賢の姿がまるで夕日を背に受けて立つ巨人の様に感じられて、怖れにも似た感覚に包まれた。ドキドキと聞こえてくる心臓の鼓動を鎮めようとして、恐る恐る右手を出し、「こんにちわ。私、・・・崎野祐子といます」と応えた。賢の手はとても暖かく感じられた。その後どうなったのかはっきり記憶に残っていない。確か、小走りでアパートに戻ったような気がする。しかし、頭がカーッと熱くて、体が小刻みに震えていたのだけは覚えている。今とまったく同じ感覚だった。

「・・・もしもし、・・・もう一度ファミレスに来てみないか」

「あっ、・・・ごめん・・・わたしも、今そう言おうとしていたのよ。すぐそっちに行くわ」

少年はまだ防波堤の上に寝ころんでいる。先ほどより少し体を道路から遠ざけたようだ。周りを見回してみたが、老人の姿は無かった。祐子は隅田川堤のコンクリートの遊歩道を駆け降りると、急いでファミリーレストランに向かった。早足なら10分で着く距離だ。息が切れてきて、

胸の鼓動が吐く息のリズムに同期してきたように思えた。数馬はレストラン横のコンクリートの階段に腰掛けていた。

「何かしっくりこないな。祐子、何処を捜した？」

「川岸。何も分からなかった」

「もう一度、レストランに入ってみようか？」

「うん」

「いらっしゃいませ。あ、先ほどのお客様」

出迎えたのは、40歳前後の小柄なウエイトレスだった。やはり、静かな感じだ。

「少し休憩しようかと思って」

数馬は変なことを言った自分をおかしいと思った。

「どこでも、お好きな席をお選びください」

レストランの中にはまだ客の姿は無かった。ふたりは先程と同じ席に着いた。

「さっきと同じ位置に座って見ない？」

「うん」

円弧の部分が窓に沿った半円形のテーブルだ。そこに祐子が円弧の中程、数馬は左手に座った。先ほどは賢が数馬と向かい合って右手に座っていた。座席は空いているのに、ふたりはなぜか賢の居た場所に空虚な感じを覚えなかった。

「いらっしゃいませ。とても静かな日ですね。またご来店くださいましてありがとうございます。何になさいますか？」

ふたりは、驚いて顔を見合わせた。

「えっ！あの一っ、どうしたんですか？」

「お客様、どうかなさいましたか？」

「あなた、無事だったんですか？」

「えっ？」

「わたしたち、あなたがいなくなったとばかり思って。さっき店の方がそんなことを言っていたもんで」

「えっ!? わたくし、ずっとここで働いておりましたが・・・」

ウエイトレスは訳が分からない風だった。確かに先ほどとほとんど何も変わっていなかった。違っている点は、時間が経過したことと、賢がいなくなったことと、日差しが少し弱まったことくらいだ。

「あの、コーヒー3つ、お願いします」

「かしこまりました」

祐子は数馬が3つと言ったのに違和感を覚えなかったが、ウエイトレスが、3つという数に特に変わった反応を示さなかったことを不思議に思った。ふたりは押し黙ったまま、身動きもせずにいる。5分ほどして、ウエイトレスがコーヒーを盆に乗せてやって来て、

「お待たせしました」

と言って3つの受け皿を数馬と祐子、そして賢の座っていた席の前に置いた。賢がいないことは気にも留めていないようだった。

ウエイトレスが会釈して立ち去ると、間髪を入れず賢が化粧室から姿を現した。何事も無かったかのようにテーブルに近づくと、自分の席に着きながら言った。

「やあ、ごめん、ごめん、ちょっとぼーっとしてたもんだから。あつ、俺の食事もう片付けられちゃったのか、じゃあ、コーヒーでも頂くか」  
数馬と祐子は言葉が出なかった。ふたりとも自分の正気を確認めるかのように、頬に手を当てながら顔を見合わせた。一息吐くと、祐子は涙が込み上げてくるのを覚えた。ふたりは無言で賢の顔を見つめていた。

「どうした、何かあったのか？」

賢が無造作にコーヒーを口元に持ってゆくのと同時に、数馬は出ない言葉を無理矢理絞り出すかのように、やや強い口調で話し始めた。

「お、お前、本当に今トイレから出て来たばかりか？」

「えっ!? 見ての通りさ。洗面台の鏡の前で少しぼーっとしていたけど。あれ?そんなに経ってた？」

「もう、日が暮れるぜ」

「えっ！」

祐子は悲しみがこみ上げてきた。ポシェットからそっとハンカチを取り出すと、ふたりの視線を避けるように涙を拭ってから言った。

「賢くん・・・分からないの？私たち、あなたを捜したのよ。昼に一旦チェックアウトして・・・このコーヒーは夕方のコーヒーなのよ」  
「えっ、本当か？どうなったんだ？俺は、化粧室に行って来ただけだぜ」  
「随分探したんだぞ。5時間も探し廻ったんだ」

親子連れが隣の席に案内された。

「パパ、釣り、また連れて来て。ねえ、いいでしょ」

男の子がせがんでいた。父親は「うん、うん」と頷いている。祐子は小さな声で、「あの川岸にも行ったのよ」と言ったが、ふたりには聞こえなかった。

「俺、何度もトイレを見たぜ。トイレ側にもシンク側にも、お前の居た痕跡はなかったけどな。ちょっと、化粧室のドアを開けてから、出て来るまで、どんな風だったか説明してみろよ」

「俺、なんか変な感じだって言ったろう。妙に意識が冴え渡っていて、そのくせ、全体がぼーっとして見えにくい感じだったんだ。化粧室の木の扉を開ける時、ハンドルがあるだろう、あれを回した感じがしないうちに中に入っていたんだ。鏡を見ると、自分の姿が見えにくいんだ。なんかぼんやりしていて。水道のレバーも拍子抜けするくらい軽かった。顔を洗ったんだけど、水がもの凄く冷たく感じたんだ。洗い終えたときハンカチが無いのに気付いて、掌で水気を拭いたんだ。3、4回こうして拭いて、少し乾くまでそこにいようと思って、鏡を見ていたんだ。そしたら、周りが光の海のように輝いてきて、なんか意識まで急にぼーっとして・・・ふと、我に返って、席に戻ったって訳」

「えっ。じゃ、その間にかこれ5時間くらい経ったって訳か」

「俺からしてみると、ただトイレに行って、顔を洗って、帰って来ただけなんだけどな」

「あのウエイトレスさんも、見えなくなっていたのよ」

「ほんとか？あのウエイトレス、確か、俺がシンクの前で鏡を見ていた時、化粧室のドアを開けて入って来たんだ。それで婦人用のトイレの扉の方に行ったかなと思ったんだが、なんだかぼーっとして、その前後のことがはっきりしないんだ。兎に角、我に返ったらシンクの前で自

分の姿を見ていたという訳さ。そう謂えば、体が背骨に沿ってカーッと熱かったのを覚えている。そう、確か顔も紅潮していたな。意識をしっかりとさせようとして、また顔を洗って出て来たんだ

「不思議なこともあるものだ」

祐子は心穏やかでなかった。賢とウエイトレスが化粧室の中で消えて、ふたりとも何事もなかったかのように戻って来たことに、不安に似た心地悪さを覚えた。

「確かに、食事が片付けられているところを見ると、時間が経っているんだな」

「随分探したのよ。川岸にも行ってみたし、賢くんのアパートにも行ってみたわ」

「この辺りの店を廻っていろいろ聞いてみたんだぜ」

「ごめん。だけど俺には、普通の時間経過としか感じられないんだ・・・ごめん」

「お前の言う複素次元が現実のものになりそうだな」

賢は、何時ものように淡々と話し始めた。

「複素空間での変化だけど、こんなこと考えられないだろうか？複素数の積を考えると、最初のベクトルに別のベクトルを掛け合わせると、その結果、元のベクトルに変化が与えられるだろう。ベクトルは大きさが変わり、回転によって方向が変わる。つまり、演算結果で出来る合成ベクトルを作用の後の結果と考えれば、最初のベクトルは移動する場合もあるということになる。複素ベクトル空間での現象になるよな。このことを現実世界に適用してみると、それじゃ何故、実数に相当する普通の生活空間で、いつも移動や変形が起こらないかということなんだけど・・・うーん。静的か動的かということと、エネルギーが大きいか小さいかということと、作用できる、つまり同調できるかどうかということだと思うんだな。実数だけの複素ベクトルでも把握するのが難しいのに、それに作用するベクトルが、複素数とくりゃ、一旦変化したら、もう、どうやって元に戻したらいいのかよく分からない。うーん難しい問題だ。それと、ガウスの代数基本定理によると複素数の  $n$  次の代数方程

式は重解も含めて必ず  $n$  個の複素数の解を持つっていうだろう。このことはこの世の中—つまり  $n$  次の複素数の代数方程式—はどんなに高い次元にまで上り詰めたつもりでも、結局はこの物質世界—つまり実数世界—と見えない世界—つまり虚数世界—の2つしかないということさ。もちろんその段階は幾重にも広がっているけどな。だから、この物質空間だって、脳の判別できるフォログラフィックな干渉像でも見える物と見えない物があるってこと。ある条件下では見えなくなる場合もあるんだ。普通は我々全体の総意で定義されているから見えるんだけどね。例えば花粉視はよく、顕微鏡の話をするだろう。彼が言うには光は途中で姿を消す場合があるんだって。たとえば、ガラス面の全反射なんかがそうだって。ガラス窓を正面から見ると向こう側の景色が見えるけど、斜め横から見ると、突然見えなくなるだろう。あれが全反射さ。その全反射がある時はこちら側では見えないのさ。じゃあ、そのやってきた光はどこに行ってしまったかという、虚空間に移行しているって考えるんだ。光は存在するんだけど見えない。もしかすると、俺やウエイトレスにも同じことが起きたのかもしれない。つまり脳が認識できない状態になったってことだ。それが見る方角によって見えなくなったんじゃないかと、何か別の原因によって、光が虚空間に移って、こっちに届かなくなったのかも知れないな」

数馬と祐子は賢の話すことが全く理解できなかった。

「賢くんの言うこと全くわからないけど、だけどこの世界から見えなくなっても声くらい聞こえるんじゃないの？」

「いや、声も聞こえないと思うよ。音は空気の振動だから、振動が虚空間の中で起きていると、やっぱり聞こえないだろうな」

「だけど、あのウエイトレス、ずっとレストランの中に居たって言うし、賢くんのこと呼んでも、何の応答もなかったけど……」

「それに、おまえには時間が普通に過ぎたように感じたんだろう」

「光と時間は関係しているみたいだからな、それもあり得るかもしれない」

3人とも、一瞬自問するように黙り込んでしまった。無言の状態は3分

間ほど続いた。沈黙を破って賢が言った。

「俺たち、この失踪事件を調べてみないか？自分の考えるやり方で、それぞれ調べて、何か分かったら、みんなに報告する。そして、この仲間としての結論を導くなんてのはどうだろう」

祐子が応えた。

「わたし、乗るわ」

それを聞いて数馬が言った。

「うん。俺はどちらかと謂うと現実主義だから、見える結果を期待するけど、まあ、賛同はするよ」

「それじゃ、私、亮子にも伝えておくわ。彼女今、具合が悪いから、それどころじゃないと思うけど、一応伝えておくわ」

数馬が心配そうに祐子の顔を覗いた。賢が祐子に伝えて言った。

「じゃ、祐子、亮子さんには上手く伝えておいてくれよ。それに亮子さんに、どこの具合が悪いのか詳しく聞いといてくれないか」

みなそれぞれ、コーヒーを口にした。

「おれ、明日から鹿児島に出張なんだ。ちょっと長くなるかもしれない。これから出張の準備をしなくちゃならないし、朝早いから、先に帰るよ」

「数馬はいつも忙しそうだな。気を付けて行って来いよ」

「どれくらい？」

「そうだな、2週間ぐらいになるかな。新しい取引先との仕様の詰めなんだ」

「大変ね。それじゃ私たちも……」

「いや、もう暫く、ゆっくりしたほうがいいよ。疲れているだろう」

「悪いな、すっかり迷惑をかけたみたいで。気を付けて行けよ。ありがとう。そうだ、昼飯代……」

「いいよ、それくらい」

「悪いな、じゃ、また」

「気を付けてね」

数馬が席を立ててふたりに背を向けたとき、その後ろ姿に向かって、賢は無言で軽く頭を下げた。

「ごめん」

数馬が見えなくなったとき、祐子が顔を綻ばせて言った。

「よかった。さっきね、賢くんと初めて遭ったときのことを思い出していたのよ」

「祐子、本当に俺そんな風になっちゃったのか？それはそうだよな。だけど、自分の中では、何かこう、少しぼーっとしてただけって感じなんだけど」

「とても心配したのよ。どうしようって思って」

「ごめん。なんか、やたら疲れたって感じだ」

祐子は、それは精神的な疲れだと思ったが、賢は身体<sup>からだ</sup>が疲れ切っていた。

「賢くん、きょう夕飯作ってあげるよ」

ふたりはレストランを出て、大通りを賢のアパートとは反対方向に歩き始めた。ふたりがふとレストランを振り返ると、消えたウエイトレスが両手で胸元に盆を抱えたまま、窓越しにこちらを見て佇んでいた。祐子は賢に寄り添うように体を寄せた。

「祐子、さっきお手洗いに行く前、おまえのことが眩しくて見えにくかったんだけど、今は普通になったよ」

「そう？何故かしら。夕方になったからかな？」

「分からない」

10分ほど歩くと細い道幅の住宅街に入る三叉路に出た。そこを右手に曲がり、少し古い時代を感じさせる町並みの奥に祐子のアパートはある。セキュリティゲートもないアパートだ。エレベータを4階で降りると、右手の3室目が祐子の部屋だった。祐子は鍵を開けて中に入ると、振り向いて「どうぞ」と言った。賢は祐子の部屋に入るのは初めてだった。カーテン越しに西日が入り、祐子の姿が輝いて、浮き上がっているように見えた。美しかった。

「複素関数論という特異点って、無限の世界、創造主の世界への入り口だと思わない？」

祐子が賢の方を振り向かず独り言のように言った。祐子は自分の口から出た言葉が信じられなかったが、何時も賢から聞かされている話を反

復している自分を小気味よく感じた。

「特異点から見れば周りに展開するどんな事象も、その無限の位置から見ればね、すべて同じ規模なのだと思うわ。さあ、中に入って。今から食事を作るわ。賢くん何がいい？」

「おいおい、何でもOKなのか？」

「さあ、どうかしら」

「本当か。じゃ、スパゲティのカルボナーラとサラダそして、白ワインなんてちょっとしゃれていていいじゃないか？ ははは、冗談だよ。何でも祐子の得意のものでいいよ」

「そのリクエストOKよ。すぐ作るわ」

「えっ!? 本当か？いきなり言われてOKなんて、まるで俺の好み分かるみたいだな」

「うん、分かるよ。いつも賢くんのイメージが頭にあるもの。気持ちも見えるような気がするよ」

「それは・・・やばいな」

祐子は賢がどんな反応をするか、観察した。賢はただじっと自分を見つめていた。祐子は賢と目が合ったような気がして、さりげなく冷蔵庫に視線を移した。

それからは手際がよかった。まず、2枚のピンクのランチマットを敷き、ナプキンを置き、ホークと大きめのスプーンを並べ、カップボードからグラスを2個取り出して、テーブルに置いた。さっと、姿勢を変えると、冷蔵庫から山梨産の白ワインを取り出して、オープナーと一緒に賢に渡した。その動きはまるで、レストランのウエイトレスのようにスムーズだ。ふたりは黙々と自分の仕事をした。賢は注ぎ口に巻き付けてある金属の覆いを悪戦苦闘して外し、ボトルを股の間に挟んで、やっとの思いで、コルク栓を開けた。賢の思考は停止していた。祐子は今日一日の出来事に思いを巡らせていた。スパゲティを茹でながら、祐子が話し始めた。

「今日のことね。どうしても分からないわ。だって、賢くんばかりじゃないでしょ。あそこのウエイトレスだっていなくなっていたのよ。丁度

賢くんがいなくなったとき」

「そうらしいな。俺にも、どうなっているのか分からない」

「あそこのレストランにはそういう場があるのかしら、物が消えるとか？もしかしたら、一時的にそんな場が出来たのかも知れないわね」

「確か、俺、お手洗いに入るとき、強い視線みたいなものを感じたんだ。いや、感じたと言うより、見えたと言った方が近いかもしれない。背後からだっただけ。それが、さっき帰りにウエイトレスがこっちを見ていただろう。その視線に似ているように思えるんだ。強いんだけど、ソフトなんだな」

祐子はちょっと不快な気分になって、それを打ち消そうとした。

「私にはそんな風には感じられなかったけど」

カルボナーラが出来上がった。祐子は右手に賢の皿、左手に自分の皿を持って、ウエイトレスがやるように体を斜に構えると「どーぞ」と言いながら賢の前に、そしてその向かいの自分の席に置いた。その後で、大きなサラダボールに盛りつけた生野菜のサラダをテーブルの中央に置いた。

「お待ちどうさま。さあ、OKよ」

賢は祐子の瞳が輝いているのを見た。

「ありがとう」

「じゃ、乾杯しましょ」

賢はまず祐子のグラス、そして自分のグラスにワインを注いだ。注ぎ終わるときボトルを少し右に回転させてみた。祐子がやるように美しくできたかなと思った。

「賢くんの無事の帰還に、乾杯！」

「乾杯！そうか俺は行方不明になったんだ。祐子、ありがとう・・・」

賢はグラスを置くとホークを手にして、スパゲティを一口食べた。

「うん、旨い。おまえ、いつからこんな料理作れるようになったんだ？大したもんだ」

「あなたの為よ・・・なんて言っちゃって。ねえ、賢くん、今度の日曜日、面白いところに行かない？」

「あの、鷹釣りだろう？」

「どうして分かるの？」

「いつだったか、鷹の話してただろう。鷹はすごく目がいいとか何とか。昨日、会社で新聞読んでたら、広告が入っていたんで、おまえ、きっと行きたがるんじゃないかなって思ってさ。いいよ、何時からだ？」

「朝、9時からよ。ああ楽しいな」

「よし、分かった。それにしても、お前、料理がうまくなったな。レストラン並、いやいや全然旨いぜ」

「賢くん、今日、帰る？」

「当たり前だろう、おまえ、嫁入り前だぞ。いいのか？」

「う・・・うん、冗談よ」

「だけど、あのウエイトレスは不思議だな」

「賢くんの方が、もっと不思議よ」

ほんの少し強目の口調で祐子が切り返した。祐子は少し顔が紅潮していて、いつもより更に陽気さが加わっているようだった。

「2人目の行方不明者のケースと似ているな」

「誰？あのウエイトレス？」

祐子はウエイトレスのことが頭に引っ掛かっている、直ぐにそちらに考えが向く自分を心で叱責した。祐子は薄地のピンクのブラウスに薄いグレーのタイトスカートを身につけている。時々、ふっと息を吐く姿がテーブルのワイングラスに映った夕日の赤と調和して、写真集で見るような艶やかさを醸し出していた。

「いや、俺のことさ。あの2人目も一度、見えなくなって、近所の仲間が探し回ったら、ひょっこり姿を現し、自分では普段と何も変わらない行動をしていたって言ってたそうじゃないか。そして、また居なくなって、今度はそのまま姿を消したんだものな」

「あの人、主婦だったわよね。何処でいなくなったんだっけ？」

「近所のスーパーで買い物中に一度消えて、その後は・・・そうだ、その次の日に自家用車で出掛けて、車ごと不明になったんじゃないかな、ちょっと思い出せないな」

「あまり、事件に巻き込まれたって風じゃなかったわよね」

祐子はそう言うと、グラスに半分ほど入っていたワインを、一気に飲み干した。

「大丈夫か、そんなにいきなり飲んで」

「大丈夫よ。賢くんがいるもの」

賢の意識は醒めていた。祐子の姿も言葉も、上気した色っぽい仕草も、すべて包み込むような暖かさが自分の胸に広がるのを感じていた。賢が、祐子のグラスにワインを注ぐと、ボトルは空になった。どうやら陽は沈んだようだ。あたりがぼんやりと薄紫色に染まってきた。部屋の中也、先ほどまでガラスに反射して、眩しく輝いていた陽の光が、戸外の建物の影のようにグレーに変わっている。

「旨かった。ありがとう・・・俺、帰るよ」

祐子は答えなかった。

「日曜日、河原で逢おう」

祐子はゆっくり前屈みになり、テーブルにうつ伏せるようなポーズをとった。

「どうしたんだ!?! 大丈夫か?」

賢が立って祐子の側に寄り、肩に手を掛けると、祐子は首を振った。

「ううん、大丈夫。何でもないよ」

賢は掌に祐子の心臓の鼓動が感じられるような気がした。

「大分飲んだからな。おれ、片付けるよ」

荒川の堤は人で混み合っていた。子供連れやカップル、年輩者が多く、車椅子の婦人も混じっていた。土手の草の少ない場所に「鳥との触れあい大会 自然融合会主催」という高さ2メートルほどの看板が立ててあった。日差しは強く、風は無かった。祐子は8時半に会場に来ていた。次第に増えてくる人混みの中に賢の姿を捜した。空には2、30羽の鷹やカラス、鳩が群れになって入り乱れて飛んでいた。一寸見ると入り乱れているように見えるが、よく見るとどうやら飛んでいる高さが違っているようである。まるで、鳥たちもこのイベントを知って、集まって来

ているという雰囲気だった。

「あーっ。お父さん、あんなに高いところに一匹いる」

「一羽って謂うんだよ。どこ？あー、いたいた。お父さんには点にしか見えないよ」

「その横にも、もう一匹」

2羽の鳥は祐子にも見えた。その大きさが、少しずつ大きくなってくるように感じた。

「やあ」

いきなり背中からの声に、祐子はビクツとした。さっきまでは賢の姿を求めていたのに、どうして驚くのかと祐子は自分の反応を不思議に思った。賢は黒いTシャツにジーンズ、トレッキングシューズという出で立ちだった。

「おはよう、賢くん。よく分かったわね、こんなに大勢の人の中で」

「分かるよ。君は輝いて見えるんだ」

「また、朝から、背中がかゆくなるわ」

「俺には本当に君が輝いて見えるんだよ」

「ねえ、今日のイベント、意味が分かる？」

祐子は恥ずかしくなって、話をはぐらかした。

「いいや、何を競うイベントなのかよく分からないな」

「ちょっと変わっているのよ。如何に小さい餌で鷹を呼べるかという競技なの。鷹は、高い空の上から、小さな物を見分けられるらしいの。特にそれが食料の場合はね」

「そうか。つまり、どんな小さな餌で鷹をおびき寄せられるかっていうゲームなんだ。聞いたところによると積丹半島のミサゴは、上空から海の中の魚に的を絞って急降下して捕まえるらしいから、鷹なら結構小さい餌でも見分けられるのかもしれないな」

「そう、そういうこと」

「なんだ、簡単な競技じゃないか」

「でも、鷹は見ているのよ。こんなに大勢の人がいても、何処で、誰が餌を持っているかを。本能ね。よく、「鳶に油揚げを浚われた」って謂

うでしょ。油揚げを見ているのよ」

「ふーん、それで祐子、おまえ、何か準備して来ているのか？」

「勿論よ」

そう言いながら祐子はショルダーバッグを降ろして、中からA4版の青いプラスチック板と丸い雁もどきの入ったビニール袋、そして買ったばかりのデジカメを取り出した。

「ルールがあるのよ。A4サイズの板の上に餌を置くの。それで、それを決められたサークルの中に置いて、3分間観察するの。どのくらいの時間で鷹に餌を持ってゆかれるかを競うわけ。餌にはランクがあるのよ。直径10センチメートル以上、5センチから2センチ、2センチから1センチ、1センチから5ミリ、5ミリ以下の5段階なの。申告制なの。面白いのは、餌には何を使ってもいいってこと。勿論食べられる物よ。事前に申告するの。あとは、どんなアトラクションを行ってもいいことになっているのよ。いろいろな演出があって面白いのよ。去年なんて、歌を歌ってた人がいたわ」

暫くすると川の土手は人で埋め尽くされた。主催者と思われる青い腕章をした30歳前後の男性が、大きく円を描くように右手を回した。

「始まるわ。私は13番目よ。事前登録してあるのよ。ルールがあって、ひとりの持ち時間は3分、段取りと片づけで2分、合計5分でしょ、5分に一人ずつ挑戦するの。主催者側は大きなプラカードを示すだけよ。マイクは最後の表彰の時だけ。鳥が驚いて逃げないようにしているのね」

間もなく、一人の中年の男性が赤い色の板に小さな肉片のような物を乗せて、主催者の一団のいる土手から川岸に降りて行った。手には分厚い手袋、頭にはヘルメットを付けている。彼はサークルに入ると、赤い色の板を自分の頭上より少し高く掲げ、それをサークルの中心に置いた。その後が見物だった。2羽の鷹が彼を目掛けて急降下して来た。1羽は素早く、その肉と思しき物を掴むと、そのまま空に向かって急上昇した。もう1羽は途中で川の方に向きを変え、そのまま対岸の空に向かって飛んで行った。1分もかからなかった。主催者の中の一人が赤い丸印を書

いた白色のプラカードを掲げていた。もう一人の主催者が、黒字の3という数字のプラカードを掲げている。一人の子供が拍手をしたが、母親がそれを制した。どうやら参加者以外は音も立ててはいけないことになっているようだ。鳥たちの動きが心なしか活発になってきたように感じられる。

「あれどういう意味？」

「今の挑戦は成功で、3番目のクラスの餌だったってこと。時間は分からないわ。随分早かったみたいけど」

「うん。びっくりしたよ。なかなか考えるもんだな」

次の参加者は20歳代の青年だった。彼は透明の板の上に小さな茶色の魚の形をした餌を乗せて、サークルの中に入って行った。板をサークルの中心に置くと、3メートルほど離れて、腕時計を見た。鷹はほとんど反応しなかったが、規定時間になって彼が板を取り出しにサークルに入ろうとしたとき、1羽の鳩が舞い降りて来た。鳩は直接餌に向かってではなくサークルの外側に降り、サークルの中に入らずに右に左に歩き廻っていた。審判員がX印のプラカードと4と書かれたプラカードを掲げた。

「だめだったみたいだな」

「そうね」

次は中年の男性だった。鷹の模型を片手に持っている。模型はとてもよくできていて、まるで生きてるように見える。彼のボードは緑色の地色の真ん中に直径10センチほどの黄色の円を描き、その中央に小さな肉片のようなものを置くという一寸手の込んだものだった。彼はボードをサークルの中心に置くと、その外側に鷹の模型を置いてから、10メートルほど遠ざかった。とほとんど同時に1羽の鷹が急降下し、模型の鷹の近くを掠めて飛び去った。餌の方には目もくれないようだった。一旦飛び去った後、鷹は上空に舞い上がり、降りて来る気配を見せなくなった。

「だめみたいね」

審判員がX印のプラカードと5と書かれたプラカードを掲げた。

その後も挑戦者が続き、やがて祐子の番がやってきた。

「写真撮ってね」

そう言って祐子はデジカメを賢に渡すと、先ほどのプレートと雁もどきの袋を手にして主催者の方に向かった。前の挑戦者が失敗に終わり、祐子が登場した。輝く太陽の元で、賢は祐子の純白の輝きに、まぶしさを覚えた。祐子の雁もどきは、祐子がサークルの外に出て一呼吸する間もなく、急降下してきた鷹に獲られた。ほんの一瞬だったが、賢はそのシャッターチャンスを逃さなかった。青い空、太陽の光を受けて金色に輝く川面、純白の祐子、黒い鷹のコントラストが、鷹の急降下から餌の捕獲までの一連の動きの中で融合したように思えた。審判員が丸と2のマークを掲げた。祐子が賢に向かって両手を大きく振った。賢も左手を振って応えた。

その後もゲームは続き、いよいよ、最後の挑戦者の番になった。

「全部で23名の挑戦だったのよ。もう一人追加になったのかしら」祐子はその挑戦者の姿を見て驚いた。あの隅田川の川岸にいた老人だった。老人はあの時と同じ服装をしていた。何も置いてない木の板をサークルの中央に置いて外に出た。老人が空を見上げると、いつの間にか3羽の鷹が滑空して来て、サークルの中に降りた。鷹は順番を決めてでもあるかのように、交互に板の中心をついばみ、螺旋を描きながら飛び立って行った。一呼吸間を置いて、見物の人たちから大きな拍手がわき起こった。誰もが老人がアトラクションをやっていると思っているようだった。

やがて、審判員が拡声器を使って放送を始めた。祐子は3位に入った。

祐子は記念品をもらって小走りに戻って来た。

「おめでとう！何もらった？」

「写真立てよ。ねえ、賢くん、あの人昨日隅田川の川岸にいた人よ。不思議なお爺さんなの」

「へー、鷹の操り方、うまいもんだな」

「あのお爺さんと話をすると、何か全部見透かされているみたいな気がしてくるのよ」

「ふーん」

「賢くんのことも知っているみたいよ」

「どうして？」

「分からないけど」

「ふーん」

賢は老人を眼で捜してみたが、何処にもその姿は無かった。

“鳥との触れあい大会”翌日の昼食時に、賢は食堂のテレビで、2日後の水曜日に「第4の失踪事件検証」というタイトルのテレビ番組が組まれていることを知った。賢が祐子より先にテレビの情報を得るのは稀なことだった。早速、祐子を誘って自分のアパートでこの番組を見ることにした。午後8時が番組のスタートだった。賢が玄関の方を見るとほとんど同時にチャイムが鳴った。

「こんばんは」

賢は扉を開けた。祐子の姿が光輝いて美しく、まぶしかった。

「祐子、今日も美しいな。さあ入って」

玄関には祐子の為にクリーム色のスリッパがきちんと出されていた。祐子は賢の言葉に顔を赤らめながら、靴を脱ぎ、スリッパに履き替えた。水色のブラウスと紺のスカートを身に着けている。賢のアパートは小綺麗だが家具はあまりなく、ベッド、ソファと32インチのテレビ、それに中型の冷蔵庫、細長い食器棚と書棚が、壁を背に無造作に置かれているだけの殺風景な部屋だった。冷蔵庫の横に半間ほどの流し台があるが、その周りには何も置いてなかった。全体で20畳程度の洋風1室の部屋で、ベッドの横が押し入れになっていた。風呂はトイレも組み込まれたユニットバス、床はフローリングで、何も敷かれていない。冷蔵庫の前に4人掛けの、一目で合板と分かる木のテーブルが置かれている。陽は既に沈み、外は薄暗く、部屋のカーテンは引かれていた。賢は祐子にソファに座るように促し、冷蔵庫から缶コーヒーを二つ出して来て一つを祐子に渡した。

「もう始まるよ」

賢はまだよく映る初期の液晶テレビを点けた。ふたりとも4番目の失踪者については詳しくは知らなかった為、興味深々でテレビに見入った。その事故が発生してから、新聞もラジオもこの失踪事件のことを頻繁に伝えていたが、彼を見つけ出そうとすること、それがほとんど不可能だと判断したのは、バスが落ちて丁度1週間経ってからだ。新聞には、今回CBAテレビがバラエティ番組で謎の失踪事件を大きく取り上げ、報道を行うことになった理由を、「あまりにも不可解な事件—新聞にはそう表現されていた—で、5ヶ月が経過しても依然として、その痕跡すら掴めず、失踪した青年の両親が旅行代理店に対して訴訟を起こした為、テレビ局として真実を追究する模様」と説明していた。番組に先立ち、キャスターが、「これから放映される事故再現ビデオの内容は、これまで未発表の事実を含め、忠実に事件の内容を再現している」と説明した。彼は衝撃的に消えた。大山の中腹で起きた事故だ。晩秋の寒さが厳しくなったのを感じる朝であった。松江から鳥取に向かう山陰地方の観光バスは大山を越えて鳥取に向かう大山環状道路を走っていた。乗客は社外に移りゆく紅に染まった木立や、時々現れる山肌を眺めていた。バスがカーブに差し掛かった時、突如左側の斜面に群生している赤松の枝から、前日に降った雨の飛沫がバスの運転席のウインドウに降り掛かった。それと同時に山肌から砂利を含んだ土塊が、バスのすぐ手前に滑り落ちてきた。まるでぎーっと音を立てたように感じた。運転手はそれを避けるべく急ハンドルを切った。バスは右側に回転しながら滑った。乗客にも滑った感じが分かった。「わぁー」という叫び声とともに、乗客は手当たり次第に近くにあるものにしがみ付いた。バスは30メートルほど下の沢まで転げ落ち、そこに正立して止まった。映像に映し出されているフロントガラスと右側の窓ガラスは悉く割れて飛散し、その欠片が残っている程度だった。しかし、不思議なことに、バスの外観は元の形を保っていて、まるで夏の日に窓を全開して停車してでもいるかのような印象を与えた。およそ3回転したとのことだ。国道の後続の乗用車からの連絡を受けて救急車が到着するまでに30分ほど掛かった。空気は冷たかった。乗客の内、意識があったのは2人だけだったという。何

れも若者だった。一人は25歳の女性で、母親と二人でツアーに参加していた。額に一筋血が流れていた。その母親はバス内の通路に横たわっていて、出血はなかったが、気を失っていた。もう一人は29歳の男性で、フリーライターとのことだった。彼は無傷であったが、自分の座席の背もたれと歪んだ前の座席の背もたれとの間に挟まれて、動けなかった。その他の乗客はそれぞれに怪我をし、意識を失っていた。バスの中は旅行客の荷物や、衣類などが散乱していて、それが不自然な位置に散らばっていた為、バスの外から見ると、非常に奇異な印象を与えた。座席は前から2番目の席と後方の席の2カ所が歪んで変形していたが、外れたり、潰れたりとはしていなかった。ほとんどの乗客が座席にはおらず、折り重なったり、頭を下に宙返りしたような形で<sup>うずくま</sup>蹲ったりして、奇怪な情景を描出していた。警察が到着するまでには、それから15分ほど掛かったが、そのときには、意識のあった25歳の女性の母親を除いて全員が意識を取り戻していた。意識の戻った女性たちは泣いていた。男性たちは茫然自失していた。言葉が出なかった。5台の救急車が次々に到着すると、すぐ救護活動が開始された。救急士は担架を持って車から降りて来て、直ぐに山肌の灌木を避けながら沢に降って行った。後続の車の中には、事故現場を徐行しながらも、現場から視線を逸らすように通り過ぎるものもあったが、大抵の自家用車は立ち止まって、事故処理の顛末を見ようとした。警察官たちは停車している自動車に注意を与え、渋滞が起きるのを避けようとしたが、その努力も空しく、車が全く動かなくなった。路肩に停車した1台の車の運転手が急いで車から降りると、崖を下方に向かって駆け降りて行った。啜り泣きと、呻き声の聞こえる沢は、土砂の削り落とされた痕と、バスから流れ出した油で、優美な晩秋の自然を台なしにしていた。救急士が3名の婦人を3台の担架に載せて、崖をよじ登って行った。まるで、こんな事故はいつでも起きるとでも言わんばかりの手際の良さだった。救急隊のメンバーが大きな声で「大丈夫か？怪我の程度は？」と叫んでいた。

運転手が既に病院に運ばれた後だったので、一人の警察官が怪我のなかった2人に対して、簡単な事情聴取を行った。ふたりは荷物や壊れた座

席で混乱しているバスの中から何とか自力で出て来ていた。

「本当に怪我はなかったのですか？このあと、念の為に病院にお連れします」

ふたりともほとんど同時に答えた。

「大丈夫です」

「ツアーのコンダクターはどなたですか？」

女性が答えた。

「あの前から2番目の席でうずくまっている方です。笹倉さんという方です」

「あっ、まだあの方、病院に運ばれてない。怪我しているようだけど？また、後でお話を聞かせてください。まずは、怪我人を収容しなくては」警官はバスの中に入って行って、ツアーコンダクターに話し掛けた。

「ちょっと気を失っちゃったんです。ああっ、どうしよう。いたいっ」「動けますか？救急車は病院に急行してしまいました。あなたはどのように救急車に乗車しなかったのですか？」

「気付いたとき、皆揃っているかどうか、確認したんですが、お客様の内、お一人の方が見えないんです。私、責任者ですから、残りました。それに、多分、足を怪我しているだけのようすし」

彼女の座っていた座席は、通路側に向いて30度ほど捻れていた。最前列の座席が前方向に倒れ掛けていた為、それが幸いしてか、彼女に大きな怪我は無かった。最前列は空席で、その空席の部分が押しつぶされたようになっていた。彼女の右手には出席者の名簿がしっかり握られていて、小刻みに震える手からくる振動を伝えて、時々ばたばた音を立てていた。恐怖心の余韻を押さえるようにしていたが、顔つきも、言葉も病人のそれであった。

「あなたも怪我をされているようですから、先ず病院に行きましょう。後で事情をお聞かせください」

警察官は彼女を立ち上がらせようと、手を差し伸べたが、彼女は立てなかった。警察官は心配そうに言った。

「だめですか？」

「いえ、大丈夫です。恥ずかしいから誰か女性の方に」  
話し声を聞いていた怪我のなかった女性が「私がお手伝いします」と申し出た。

「それではお願いします。足に怪我をされているようです」  
警察官はバスから降りて来て、交代に無事だった女性がバスに入ってしまった。

「大丈夫ですか？」

「右足が痛くて。それに私、失禁してしまったみたいで」

「大丈夫よ。これで少し拭いて」

無事だった女性は服のポケットからハンカチを取り出すと警官の方をちょっと伺ってから、そっとツアーコンダクターに渡した

彼女が膝や座席を拭うのを待って、

「大丈夫、分からないわよ。中、こんなにぐじゃぐじゃだし。私の肩に捕まってください。立てますか？」

「ええ、何とか。・・・私、見たんです。光ったんです。車が落ちる瞬間、後部座席の右手、そこが見えなくなるくらいまぶしい光が。その席にいた人がいなくなったんです。江川さんだったと思います。警察の人に言っても多分、分かってももらえないと思って。あなた、見えませんでしたか？あの光みたいなもの？」

「いいえ、わたし、バスが滑ったとき、びっくりして、もう何が何だか・・・」

バスの外から警官が呼び掛けた。

「大丈夫ですか？手を貸しましょうか？」

「え、ええ、お願いします」

無事だった女性と、警察官が協力して、やっとツアーコンダクターをバスから降ろした。

救急車がもう一台到着した。彼女は担架に乗せられて、運ばれた。無事だった2人も一応検査を受けるとのことで救急車に同乗した。

最後の救急車が出発したとき、報道関係の車が殺到して来た。しかし、そこには当事者は一人も残っていなかった。傍観者の車も全て姿を消し

ていて、バスの落下地点には、バスが滑った時に削られた斜面の跡が黒っぽく残っているだけだった。警察官はまだ10人ほど残って、バスが落下した地点から瓦体を晒して立っている地点までを必死に捜索していた。一人が不明だった。その後2日間、日を徹して捜索が行われたが、残りの一人は終に発見できなかった。その一人が4番目の失踪者だった。ここでテレビの事故再現放送は終わった。その後で、キャスターから解説があった。バラエティ番組のパネラーの幾多の憶測が話された。不思議と思わない者はいなかった。しかし、バスが落下する直前に後部座席に光が見えたという点は、ツアーコンダクターが、無傷だった女性に話ただけで、警察官にも報道関係の記者にも話されなかった。これをキャッチしたのはすっぱ抜き専門の3流週刊誌だった。このことを知ったCBAが珍しい物好きの視聴者を狙ったバラエティ番組で取り上げたというのが特別番組が組まれた真相のようであった。その後、パネラーが、空からUFOが来て彼を連れ去ったとか、彼がこの事件の本当の仕掛け人で、そこに待機していた自家用車に乗り移って、逃走したとか飛躍した憶測を喋り合っていた。やがて番組は「果たしてこの真相は何処に」というキャスターの締め括りで終わった。賢はテレビのスイッチを切った。あのレストランで自分に起きた現象と、このバスの失踪とが関係しているようで、何となく落ち着かなかった。時計は10時を廻っていた。

「なあ、祐子、俺、ちょっと旅に出ようと思っているんだけど」

「いつ？仕事はどうするの？」

「一応辞めてみるよ。今なら500万ばかりあるし、無くなったら、また働くよ」

「でも、貯蓄が無くなっちゃったら困るでしょう」

「無くなったら、その時はその時さ」

「本当に、出掛けるの？何処？」

祐子はそわそわしてきた。

「まず、大山。あの事故のあったところ。その前に、無傷だった人たちに会ってみたい」

「私、一緒に行けたらいいんだけど。会社休めないかも知れないし。あの2人はどこの人たち？」

「まだ、これから調べるんだけど、東京からのツアーだったから、多分・・・」

「近頃は、他人のこと調べにくくなってきたから、時間掛かるかもしれないわね」

「大丈夫さ。女性の方はVVツアー社のツアーコンダクターだったんだから、VVツアー社に電話すれば何とかなるさ。それに、さっきのバラエティ番組放送に、あの女性もゲストで出ていたからな。彼女、失踪した奴の両親が起こした訴訟の参考人になっているんだって」

「私も、賢くんと一緒に行きたいな。何か手伝うことない？」

「うん。じゃ、女性の会社の方に電話してくれないか？彼女の電話番号を調べてほしいんだ」

「分かったわ」

「じゃ、明日の夕方、またあのレストランで会おう。祐子、送って行くよ」

「もう少ししたい」

「10時過ぎているから、今日はもう帰った方がいい」

「私一人よ、アパート帰っても寝るだけだもん・・・でも、帰る。賢くん、いつ旅行に出発するの？」

「まだ、決めてないよ。まずは、会社を辞めなくちゃ、リストラされる前にな。今なら会社が希望退職を募っているから、条件が良いんだ」  
ふたりは賢のアパートを出て祐子のアパートに向かった。祐子は賢の左手に右手を絡めて歩いた。夜風が気持ちよかった。賢にはどうしても祐子が輝いて見えた。特に夜の通りを歩くと、それが一層強調されているように感じた。しかし、この輝きはレストランや街灯の灯とは異なっていると感じた。やがて、ふたりは祐子のアパートの下に着いた。

「賢くん寄っていかない？」

「いや、遅いから、今日はやすよ」

賢は祐子を部屋の前まで送って、自分のアパートに戻った。途中、街灯

や遠くのビルの明かりを眺めながら「あの祐子の不思議な輝きは俺にしか見えないのかな」と思った。

その翌日の夕方、祐子は大山の2人の電話番号を手にしていて、祐子はまず、VVツアー社に電話したのだが、彼女はあの事故のすぐあと、退社していた。祐子は友人を装って、何とか電話番号を聞き出した。

祐子は約束より30分も前にレストランに着いた。小雨が降り始めていた。また、あのウエイトレスが窓際の席に案内した。2人掛けの席だった。コーヒーを反射的に頼むのも、あまりに惰性的だと思い、注文を待ってもらうことにした。15分程して賢が入って来た。

「やったわよ」

祐子は明るい声で自慢げに言った。

「待った？」

「ううん」

「やったわよ。友達だって嘘ついちゃったけど」

賢は祐子の持っているメモを見つめた。例のウエイトレスがやって来た。

「こんにちは、いらっしゃいませ。生憎の雨ですね。ご注文は？」

ふたりは微笑みながらコーヒーを注文した。食事をすることは意識から飛んでいた。賢は祐子のスマホを借り、早速女性に電話を掛けた。呼び出し音が3回鳴って、すぐに応答があった。

「もしもし」

「はい」

「内観と申します。突然で申し訳ありませんが、一寸お尋ねしたいことがあります」

「はい、どのような？」

「あの大山の事故のことですが」

「テレビ局の方ですか？」

あまり否定的な応答ではなかった。

「いいえ、あなたの勤めていた会社の方から、あなたの電話番号を伺いました。僕はWEC社に勤めています。実は僕も少しの間ですけど、消

えてしまったことがあるんです」

「えっ！何て仰いました？」

「僕も少しの間消えていたことがあるんです」

「えっ！何て言いました？消えたって、あのお客さんと同じように？」

「他の人から、見えなくなってしまったことがあるんです。で、あの、あなたが遭われた事故の時、消えてしまった方がいたって聞いたものですから」

「えっ！そうなんですか？わたし、あれから、ずっと、あの時のことが尾を引いていて、夜もよく眠れないんです。会社も辞めました。今は会社が告訴されて、私は参考人として裁判所に出頭したりしているんです。でも、私も・・・」

「電話では何ですから、一度お会いできないでしょうか？お話を伺いたく思いまして」

「分かりました。どうしましょうか？」

「あなたの家の近くにある、レストランとか、喫茶店なんかではどうでしょうか？」

「分かりました。明日空いていますから、昼間、そう3時でいいですか？高井戸にあるスナック“カゼ”まで来て頂けますか？駅の出口から道路を渡らずに環八沿いに南に少し行ったところ、中の橋の少し手前にあります」

「世田ヶ谷ですね。分かりました。ありがとうございます。では明日、午後3時にスナック“カゼ”に伺います」

賢は念を押すように繰り返し、電話を切った。

「私も行っていい」

「もちろん。だけど、会社大丈夫か？俺は営業だから、何とかなるけど」

「大丈夫、午後年休取るから」

祐子は何とか自分も参加したいと思った。事件への興味より、賢と共に行動したかった。賢がどこか遠くに行ってしまうような気がして、できる限り一緒にいたいと思った。

「じゃ、明日、2時半に高井戸駅前で落ち合おう」

翌日はそよ風が時々頬を撫でる、からっと晴れた日和だった。祐子は半袖のブラウスの袖口から進入したそよ風が、肩から背筋を掠めて抜けてゆくのを、心地よく感じた。

「待たせた？」

賢が改札から出て来た。

「わたしも、今来たばかり。食事はしたの？」

「まだだよ」

高井戸の駅から50メートルほど南に向かって歩くと、環八から右側の路地に入る角に指定されたスナックはあった。それほど人目を引かない位置だった。50センチメートルほどの黒く燻した木の板に、白色の草書体で“風”と描いてある。祐子は檜の板だなと思った。中はやや薄暗かったが、テーブル席は5つほど、カウンターもあった。カウンターには小柄なママが一人いるだけだった。ほかに客はいなかった。ママがカウンターから出て来た。上品な感じの女性である。背筋をピンと伸ばして近付いて来る姿は、ふたりに、まるでこれから日本舞踊でも舞うかのような印象を与えた。祐子はよくあんな風に歩けるものだと思った。ママは抑揚を押さえた、語りかけるような口調で話し掛けてきた。

「いらっしやいませ。ご注文を伺わせて頂きます」

「こんにちは。私はコーヒー。賢くんは？」

「僕も」

「かしこまりました」

軽く会釈して、ママはカウンターに戻った。コーヒーに種類はないようだと思っただと祐子は思った。

「賢くん、今日のニュース聞いた？」

「いや」

「大変なことが起きたのよ。アメリカで。ロッキーに登った登山愛好家の73人が縦走中の峰から100メートル下の溪流に向かって一斉に身を投げたんだって」

「えっ。集団自殺か？」

「まだ分からないけど。さっき電気屋さんのテレビの前に大勢の人が群

がっていたから、覗いてみたの。登山愛好家のグループらしいんだけど、みんな陽気な人たちばかりなんだって」

「そうか。最近では理解できないことが起きるな・・・確かに危険を通してしか覚醒できないと過去の聖人は言った。覚醒を通して愛や真実そして真の解放が手に入る。だから究極の危険、死を選んだのかも・・・ところで、彼女そろそろ来る頃だな」

ふたりがドアの方を振り向くと、ほとんど同時にドアが開いた。男性だった。黒いスーツを着て、薄いブラウンの地に細かい原生動物のような形の模様が入ったネクタイを着け、ダークブラウンの皮のビジネスバッグを提げていた。店内に入ると辺りを見回してから、5つあるカウンターの椅子の真ん中に座った。

「いらっしやいませ。今日は気持ちのよい季候ですわね。何になさいますか？」

「コーヒーをお願いします」

彼は注文を済ますと、もう一度ゆっくり店内を見回わし、ふたりのいるテーブルの方にさり気ない視線を送った。

その時、またドアが開いた。一人の小柄な女性が入って来た。臙脂に薄いグレーのチェックの入ったブラウスとベージュのスカートを身に着け、腰には黒いベルトを巻き、ルイビトンのバッグを手にしている。センスのよい出で立ちだった。彼女はそっとふたりの方に視線を投げかけると、そのまま男性の左側の席に腰掛けた。

「こんにちは」

男性とママが同時に“こんにちは”と応えて、ふたりで顔を見合わせた。ママは少し微笑みながら、

「あら、ごめんなさい。お知り合いでしたか？」

「ええ。お待ちになりましたか？」

「いいえ、今来たばかりです。暫くぶりですね。あれ以来ですね。お元気でしたか？」

「は・・・はい」

賢と祐子は女性があまり元気でなかったのだと思った。

「ママ、オレンジジュース頂けますか？」

「はい・・・外はお暑いですか？」

「いいえ、そよ風がとってもいい気持ちよ。体の中を風が吹き抜けるようで」

祐子は自分と同じだと思った。賢は祐子に目配せしてから、席を立ててふたりに近付いた。

「初めまして、内観賢と申します。電話で失礼致しました。今日は無理な願いを聞いてくださりありがとうございます」

「はじめまして、笹倉佳代です。赤谷さんにも来て頂きました。ちょっと不安だったので」

笹倉が不安と言ったのは自分の心のことだったが、賢は済まないと思った。

「済みません。どうしてもお会いして、お話を伺いたくて」

「いいえ、私も、どなたかにお話ししたくって。その方が気が楽になるんです」

「内観賢と申します。笹倉さんに、無理を言ってお願いしてしまいました。まさかあなたまでお出で頂けたとは。ありがとうございます。私の友人の崎野祐子を紹介します」

「崎野祐子と申します。よろしくお願い致します」

笹倉と赤谷は会釈をただけだった。賢はふたりに自分たちのテーブルに移ってもらった。ママが飲み掛けのコーヒーと水をテーブルに移した。ママは非常に興味を抱いているようであったが、できるだけ第3者に徹しようと務めているようでもあった。賢は時々自分に注がれるママの視線を感じていた。賢が話の口火を切った。

「実は、自分も先日、一時的に消えたと言われているんです。そのとき一緒にいたのがここにいる崎野なんです。一時的とは言っても5時間ばかりの間なんです。自分ではよく分からないんです。その時、崎野ともう一人の友人がいたんですが、自分のことを探し廻ってくれて」

祐子が自分の出番だと言わんばかりに、話を引き継いだ。

「内観さん、確かにいなくなりました。化粧室に入ったまま出て来な

かったんです。5時間も。でも、そこも周辺も探してみたんですけど、姿は見えませんでした」

再び賢は話を自分に引き戻した。

「昨日、崎野と一緒にCBAが放映した笹倉さんの現場再現のテレビを観ました。あれは現実と合致しているのでしょうか？」

「ええ。多少ニュアンスが異なりますけど。大体あの通りだと思います。どうしても分からないのは、いつから彼がいなくなったかということです。今だから言えますが、私は、バスが横滑りするかなり前から、彼について、全く意識していませんでした。本当はツアーコンダクターですから、常にお客様全員を意識していなくてはならなかったのですが。正直、あの日の朝、バスに乗る時に初めに全員のことを確認して、出雲大社に行って境内を見学して、それから大根島の由志園で集合写真を撮ったんです。そのとき撮った写真がこれです。後でこの写真に江川さんが映っていたので、ここまでは一緒にいたと思ったんです。人数は数えていたんですが」

「これをコピーさせて頂けませんか？」

賢が訪ねた。

「どうぞお持ちください。元データがありますから、差し上げます・・・その後事故に遭遇し、不思議な光を見るまで彼のことはほとんど意識していませんでした。そんな訳で、あれ以来常に負い目を感じているんです」

笹倉が話している間、時々軽く合槌を打っていた赤谷が口を開いた。

「実は俺もそうなんだ。どういう訳か、彼のことを意識していなかったんだ。他の人たちも皆同じようなことを言っているんだ。もう一人無傷だった女性がいるんだけど、彼女は何も話したくないって言うんで、彼女には聞いてないんだけどね・・・俺も、朝、彼と一緒に乗車したことは覚えているんだけど。その後は彼についての記憶はないんだ」

賢はふたりに向かって話し掛けた。

「今あなたがおっしゃったように、現場再現のテレビで笹倉さん役の方は、「右後方に光が見えた」って言っていたでしょう。あれは本当のこ

とですか？」

「ええ。バスが落ちる瞬間、右側の最後列の座席の辺りが光った様な気がしたんです。最後列には彼しかいなかったんです。今となっては、気の所為だったのかとも思ってしまいますが、かなり、強い光だったような気がして。あの光と何か関係があるかも知れないと思って」

賢はコーヒーを手にして口に持っていきながら、静かに訊ねた。

「ほかには何か変なことはなかったですか？」

「皆さんもご存じですが、どうして、あのバス、あれだけあちこちぶつかって回転したのに外側があまり凹みもせずにはいたかってこと。窓ガラスや中の座席や、荷物なんかは壊れたり、散乱したりしたんだけど、結果的にはみんな無事だったし。あっ、そうだ、彼、あのツアーでは一度皆と別行動をとったことがあったんです。ほんの1時間ほどの間だったんですけど、出雲大社を見学した時、皆と離れて、皆が土産物店のガイドの人に誘導されて境内を廻っている間、誰かに会うんだって言って見えなくなったんです。でも、出発の時間になったら、バスの停車している場所に戻って来ていました。別に大したことないと思って、まだ誰にも話していませんが……」

「そうだったな。確か、何とかの老人に会うって言っていたと思う。あっ、そうだ、“海の老人”だ。で、俺はなぜ海なのかなと思ったんだ」  
祐子は“海の老人”と聞いて、ふと、自分が遇ったあの不思議な老人を思い浮かべた。

「それはいいことを伺いました。また、何か思い出したら教えてください。僕も自分のケースを対比させて考えてみます」

4人はお互いの連絡方法をメモ用紙に書いて交換してから分かれた。別れ際にママが

「ありがとうございます。是非、またいらしてください」

と言った。ママの視線は賢を追っていた。

スナックから出ると、賢と祐子は笹倉と赤谷に礼を言って分かれた。何となく、そこで分かれるのがよいという感覚を覚えた為だった。

「賢くん、今日は仕事は？」

「いや、今日はNR（不帰社）としてきたからフリーさ」

「よかった。一緒にいてもいい？」

「いいよ。俺はこれから図書館に行こうと思っているんだ。昨日も言ったと思うけど、今起こっていることを調べてみようと思っているんだ。会社を辞めて、暫くは各地を旅行してみようと思う。不可解な失踪事件がよく起きるだろう。どこから始めてよいか分からないけど、とりあえず1件1件調べようと思っている。事件の起きた場所の情報、その地域の持っている歴史、人間模様、生活様式なんかをね。最近、何か感じるんだ。言葉では言い表せないけど、丁度、こう、全体が歪んできているような・・・脳みそが必死になってその歪みを補正しようとしているように感じるんだ。このごろ多くの人が眩暈を訴えているって言うじゃないか。医者が調べても原因が分からない。まさかあの流行したコロナウイルスの影響が続いているなんてこともないだろうし、何となくその辺の事と失踪事件が関係しているように思うんだ」

ふたりは区立図書館にやって来た。賢は7つの県の情報誌を集めて来て、祐子が予め確保したテーブルに着いた。賢は7冊の書籍を脇に置き、持参したノートとボールペンを取り出した。先ず、ノートの表紙に「失踪事件調査ノート」と書き込んだ。最初のページを開き、欄外に索引と書き、初めの行に先ず<事件の概要>、次に<調査項目>として1. 人間関係、次の行から一行置きに 2. 地域情報、3. 周囲環境情報、4. エントロピー、 5. 物質的側面、 6. 精神的側面、 7. 時間的側面、8. 空間的側面、9. 意識的側面、10. 判断と書き、最後に<考察>と書き込んだ。祐子は、賢の記述の仕方があまりにもスムーズなので、呆然と眺めているだけだった。賢は書き終わると、「よし」と言ってページを数ページ繰って、欄外に2. 地域統計情報と書いた。その仕草も、非常に早かったので、祐子には適当なページに書き込んだとしか思えなかったが、後で、賢からその時書き込んだページはしかるべきページであることを聞いて非常に驚いた。祐子は賢の方に屈み込んで、囁くように聞いた。

「賢くん、何か手伝うことない？」

「うん。祐子、日本の地域と民族に関連する本を探して来てくれないか？好きな分野だろう」

「OK、わかったわ」

相槌を打つと、祐子は書籍を探しに出掛けた。賢は各書籍から地図のページを開き、必要な地図を書き写し始めた。そして、その土地に関する統計データも必要と思われる部分を写した。一向に祐子の戻る気配はなかった。暫くして、賢は必要な部分を全て写し終えてしまった。引き出してきた書籍を棚に戻しテーブルに戻ったが、それでも祐子は戻らなかった。かれこれ1時間が経過していた。賢は今書き写した記録を、思考を止めて眺めていた。ふとそのとき耳元で、祐子のささやくような声があった。賢は体が浮き上がるように、フワツとした感覚を覚えた。

「賢くん、おもしろい本があったわよ」

祐子はうれしそうに、2冊の単行本を重ねて賢の前に置いた。上の本は「日本人と神隠し」という青黒い装丁に白字でタイトルが印刷されたペーパーバックだった。

「うん、面白そうだ」

「ほんと言うと、わたし少し読んでいたの。結構面白いわよ。もう一冊は少しお堅い本なのよ」

それは柳田国男の“遠野物語”だった。

「これ、学生の頃に読んだことがあるな。だけど、もう一度読んでみよう」

ふたりは2冊の書籍の借用手続きをして、外に出た。

「賢くん。さっき何か書いていたでしょう。すらすらと書いていたけど、もう考えてあったわけ？」

「いや。初めの1節を考えて書くと後は、あまり考えていないんだ。不思議と自動的に手が動く。ページをめくるのも、ほとんど何ページ目とか考えない。さっさとそのページに辿り着く。他の奴から見ると不思議に感じるみたいだな。だけど、おれには何の意図も、矛盾もない」

「へえー。すごいわね」

ふたりは区立図書館を出た。

「賢くん。お腹空かない？」

「うん、だいぶ減ったな。今日は、俺が驕ってやるよ。祐子、俺の旅行計画を説明してやる。あのレストランに行こうか」

「うれしい！」

「あのレストランなら、自分のことも確かめられるかもしれないし、7つの失踪事件の関連性も調べられるかもしれない」

1時間後ふたりはいつものレストランにいた。食事が終える頃には、今にも大輪の下縁が西の水平線に触れそうになっていた。

「あっ、雨が降ってきたみたい」

「暫くすれば、上がるさ。それまで、俺の旅行計画を説明するよ。祐子、おまえにだけは話しておきたいと思って」

「どうして？」

祐子は特に、賢の気持ちを確かめてみたかった。

「判らないけど、そうしたい」

祐子は嬉しかった。口元に笑みを浮かべて賢の言葉を待った。

「失踪事件7件を追って見ようと思うんだ。日本では1年間に4千人もの方が行方不明のまま、失踪事件が迷宮入りしているんだぜ。何故、その中の7件だけかだけど。事件性があるという理由からさ。警察が取り上げたものの中で、不可解なものさ。先ず伊豆半島だ、1番目の事件」

「ねえ、今度のお休み、ふたりで天城に行かない？」

祐子は賢の顔を覗き込むようにしながら聞いた。

「うん」

「いいの？賢くん、あんまり簡単に返事するから拍子抜けしちゃった」

「今月一杯で、会社辞めることにしたんだ。今朝、口頭だけど部長に伝えた。会社辞めたら長旅に出るから、その前に祐子とどこか山にでも行くのもいいな。ちょっと神秘的で奥深い山なんか、面白いかも知れないな」

「賢くん、遠野物語のこと考えたんでしょ、ふふふ。わたし、お弁当作るわ」

「伊豆の天城山さ。それほど遠くないし、帰りに1番目の事件の現場を

見ることもできるし」

「いいわよ。どこでも、賢くんが決めてくれれば」

## 天城

2日後の土曜日、ふたりは特急踊り子号に乗って修善寺に向かう車中にいた。

「山が多いわね。やっぱり伊豆ね」

「この辺の地域も市町村合併なんかで昔からの名前が薄れちゃって、ちょっと寂しいな。昔話の中に出てくる土地のイメージがなくなってゆく。みんな無意識にそういうものを消し込んでいっているようにすら思えるな。今じゃ、昔の民族に絡む話をして、どこの地域の話だか、判らなくなっちゃったな。明治の廃藩置県の時と似ているな」

「ここは何処？」

「伊豆の国市っていうんだ。ほらここが菰山という駅。以前は菰山町っていう町だったから、ほかの県からも見えたけど、今は見えない。「伊豆半島にある市」くらいの印象さ」

「変わった建物があるわね」

「バブル期に建てた文化センターさ。時代会館っていう名前なんだけど、今は市の重荷になっていると思うよ。この土地固有の公演を定期的に行うとかしないと、経営が成り立たないんじゃないかな。前にここで会社の研修会をやったことがあるんだ。実に余裕のある造りさ。広い芝生の中庭があるんだけど、周りの景色も田んぼが大半だから、特に芝生の新鮮さはないね。この芝生の上で昼飯を食うと、ちょっとオープンスペースで解放されたって感じがするけどね。近所の主婦の芝上会議の場を提供しているようなものさ」

やがて、踊り子号は修善寺の駅に着いた。駅を降りると、ふたりは浄蓮の滝行きのバスに乗り込んだ。バスは川を渡ってから一旦修善寺の町中を通り抜け、その後136号線に入り沢に沿って山間を進んだ。田舎道ではあるが、特に交通量の多い道路端の木々にはみずみずしさがあまり

感じられない。やがて月ヶ瀬で伊豆縦貫道と合流してから、嵯峨沢、湯ヶ島温泉街を過ぎ、浄蓮の滝に着いた。駐車場には観光バスや自家用車が頻繁に出入りしている。14、5人の若者の一団が、大声で冗談を言い合いながら滝の入り口に向かって遊歩していた。ツーリングのグループのようだ。滝に降りる入り口には大きな観光センターという建物があり。反対側に伊豆の踊子と書生の銅像が立っている。祐子は一人駆け出して、土産物店に入って行った。まだ10時前なので客は一人も居なかった。賢が土産物店の入り口から店の中を覗くと、祐子が、小冊子を手かざに翳しながら戻って来た。表紙いっぱいかざの飾り文字で伊豆の民話と書いてある。

「賢くん、この滝の主は女郎蜘蛛だってことよ。お店の人も言っていたわ。この店から少し滝の方に降りたところに、資料館があるんだって。後で行ってみよう。女郎蜘蛛の人形が展示されているんだって。ねえ、一寸来て、この銅像私たちに似ていない？」

祐子は子供のようにはしゃいでいる。

「ねえ、写真撮ろうよ・・・あの済みません、シャッター押して頂けませんか？」

賢が返事をする間もなく、祐子はデジカメを先ほどの一団から一人だけ離れて歩いている若者に渡し、賢の左腕を抱き込んで、銅像の右手まで引っ張って行った。賢は祐子の言う通りにした。姿勢を正し、やや微笑むポーズをとった。祐子は賢の左手を自分の左腰に回すように引いた。賢も意識して祐子を引き寄せるようにした。祐子が顔を少し賢の方に傾けると、まさに恋人同士であった。

「撮りますよ、はいチーズ」

「ありがとうございました」

祐子が礼を言うと、その若者は祐子にデジカメを返し、仲間からの遅れを取り戻そうと小走りで駆け出した。ふたりは滝に向かうまでのスロープを下り始めた。店の少し下方の土産物店に“浄蓮の滝資料館”という立看板が置いてある。眼鏡を掛けた45歳位の小柄で小綺麗な印象の女性が店番をしている。ふたりは入場料を払って、店の左奥にある細い階

段を昇って行った。2階が小さな展示室になっていた。この滝の周辺の地質や、ここに生息している動植物の展示に続いて、井上靖や川端康成などこの地にちなんだ文学作品の作家の説明があった。右側のショーケースの中に、スポット照明された1メートルほどもある人形が展示してある。朱色の裏地を見せている白い襦袢の上に、ジョウレンシダの模様の入った黒い打掛を羽織った細身の女郎を表現している。つり上がった鋭い目つきが不気味な眼光を放ってでもいるかのようだ。翳した左手の不揃いな指の形で、手招きしている様子がよく表現されていると賢は思った。祐子は暫くの間、人形に見入っていた。10分ほど見学してから、ふたりは外に出た。少し下ると、急勾配の階段にぶつかった。200段ほどもある階段だ。祐子は息が切れ、膝頭が痛くなってきた。祐子の歩きづらそうな姿に、賢は「少し休もう」と言って、祐子の手を引いて、岩肌に凭れかかるように立ち止まった。

「大丈夫か？」

「うん、少し、膝が痛くて・・・でも、もう少しで降り切れるから、大丈夫よ」

「俺も疲れた。休もう」

賢はザックからチョコレートを取り出して、祐子に渡した。祐子はそれを頬張ると、右足の膝頭を擦りながら、

「時々痛むことがあるのよ。ちちんぷいぷい」

と言って、また歩き出そうとした。

「まてまて、慌てるなよ。ふたりきりだよ」

祐子はウキウキしてきた。ふたりは5分間ほど佇んで、沢に沿って作ってある山葵田わさびたを見つめていた。透き通る沢の水に濡れた山葵の葉の黄緑色は忘れかけている自然の瑞々しさをふたりの身体に吹き込んだ。賢は深呼吸をしてみた。3度目に深く息を吸い込むときに、何かを一緒に吸い込んだような気がした。しかし、それは呼気とともに出て行ったようだ。途中、鮎を串焼きして販売している茶屋の前を通り過ぎた。

「もう大丈夫、滝まで降りて行こうよ」

十数段の階段を降りると右手奥に勢いよく流れ落ちる滝の姿が見えた。

水は滝壺に落ちて白波を立てている。そのまわりに映る深い窪みが、じっと見つめると吸い込まれてゆくような深い淵を感じさせる。

「気持ちがいいわね。女郎蜘蛛が主だなんて。あの深みに棲んでいるのかしら」

「女郎蜘蛛って、民話なのか？」

「そう。むかしね、若者がこの滝の主の女郎蜘蛛の糸に巻かれたので、その糸を外して木の伐株きりかぶに巻き付けておいたら、その伐株が滝に吸い込まれたって話と、樵きこりが斧を滝壺に落とした時、美女に変身した女郎蜘蛛に拾ってもらったんだけど、口外無用の約束を破って、祟りで死んだってという言い伝えがあって、この滝は恐れられてきたのよ」

「よく知っているじゃないか」

「ほんとはね昨日、インターネットでこの地方の民話を調べたのよ。たしかに、あの滝壺は見方によっては蜘蛛の口のようにも見えるわね」

「まあ、そうだな。だけど、どうして女郎蜘蛛なのかな」

祐子は角度を変えて滝や周辺の写真を何枚も撮った。賢は先ず、土産物屋の店番の小母さんに、行方不明になった人のことを尋ねた。だが、ここではその人のことは誰も見ていないとのことだった。地元の警察や消防団が出て、滝壺の中や周辺を探したが、それらしき物は何も出てこなかった。直ぐにここの捜査は打ち切りになったと言っていた。どうやら、観光センターからこの滝壺までの間で消えたようだとのことだった。賢は仕方なく、滝の左下奥の岩穴に向けて意識を集中してみた。そこはまるで周りの自然を吸い込むような深い淵に見えた。滝壺に目を移すと、自分の意識が渦状に回転してゆくような感覚を覚え、危うく平衡感覚を失い掛けたので、元来た石段に視線を移した。賢は自分の目にした印象と、その感想を手帳に書き付けた。やがて、写真を撮り終えた祐子が賢の近くにやって来た。滝の周りにはこの辺りにしか見られないジョウレンシダが群生している。資料館の展示にそんな説明があった。その羊歯しだが幽玄な雰囲気を作り出していた。ジョウレンシダに注意を集中すると、意識がよりはっきりしてくるのを覚えた。そのことも手帳に書き込んだ。

「もう、戻ろうか？」

「うん」

帰りは時間を掛けて、一段一段ゆっくり踏みしめながら登った。途中で何度も休憩し、ふたりはその度に辺りを見回した。祐子は写真を撮ったが、賢は意識をあまり集中できなかった。観光センターの前まで戻った時には雲が広がって、明るい日差しが消えていた。店に入って、賢は店員に失踪事件のことを尋ねてみた。

「あの日は普通の日だったのよ。水曜だよ。何度も警察の方や新聞社の方なんかには聞かれたから、もう暗唱しちゃった。あの人、とても綺麗な人だったわ。滝に降りる前にうちの店に寄ったのよね。そう、そちらのお客さんと同じ、その民話集を買ったのよ。何か少し元気がないなって感じたから、気を付けるように言ったのよ。その民話集をここに置き忘れてったの。で、追い駆けたんだけど、下まで行ってもいなかったの。みんなに聞いたけど誰も下では見てないのよね。途中でいなくなっちゃったのよ。確かに階段を下ってゆくところを確認したんだけど。あの後、一日中気を付けていたんだけど戻って来なかったのよ。きっと、知らない内に帰ったんだと思っていたら、テレビで失踪のニュースやっただしょう。その時の写真を見て、あの人だって思ってビックリしたわ。警察に電話したわけ。やっぱり、ここでいなくなったんだと思うわ」

賢と祐子はお礼を言って、バス停に向かった。バスは出たばかりのようであった。ふたりはベンチに腰掛けた。祐子は賢に寄り添って、耳元で囁いた。

「賢くん、バス、行っちゃったみたいだから、時間あるわね。さっきの民話読んであげるわね」

「うん」

祐子は先ほど買った小冊子のページを繰って、女郎蜘蛛の話の箇所を読み始めた。

「むかしむかし、この里に住むひとりの若者が、ただひとり滝頭の山畑で麦の苗床を作ろうと土を耕していた。若者が振り下ろす鍬が土に食い込む音と、ドーンと響く滝の音以外には、音を立てる物もない。春の穂

やかな日差しの中で若者は少し疲れを覚えて鋏を置いた。畑を縁取っている磐に腰を下ろして青い空を眺めていたが、爽やかな風が心地よく、ついうとうとしてしまった。やがて夢の中に、この世の人とも思えない黄色と赤と黒の原色の渦巻き模様が美しい着物姿の妖艶な女が現れて、自分の疲れた足をさすってくれた。若者はそのまま心地よくしていたが、この美しい女は着物の帯を解くと、その帯を若者の足に巻き付け始めた。驚いてよく見ると女は消え、大きな女郎蜘蛛が一匹、若者の左足に太い糸を巻きつけていた。女郎蜘蛛の動くこそばゆさに目を覚まし、変な夢を見たと思っているうちに、またうとうとしてきた。ふと気が付くと、女郎蜘蛛は、まだせつせと糸を掛けている。そのまま、ボーッと見てみると、一旦滝の方に去って行き、また引き返して来て糸を引く。蜘蛛の糸は知らぬ内に、撚り合わせたように太くなっている。やがて、女郎蜘蛛の姿が見えなくなった。若者は気味が悪くなり、そっと立ちあがったが、蜘蛛が折角束ねた糸を切って捨てるのも可哀想な気がしたので、捻りながらなんとか足から外して、さっき途中まで掘り起こした桑の木の切株にくるくると巻き付けた。漸く意識がはっきりしてきたので鋏を手にもた麦畑に入った。そのとき、目が眩んだのか、大地が大きく揺れたかと思うと、滝水の響きが地鳴りのような轟とどろきに変わった。若者が驚いていると、蜘蛛の糸を掛けた桑の木の伐株が、めりめりと音をたてて引き抜かれ、滝口に向かって一気に地を引きずられ、滝壺目掛けて落ちて行った。若者は恐れおののいて滝壺を見下ろした。不気味な黒い水の渦が、真白い泡の歯をむき出して口を開いたように桑の根株を飲み込んでいった。若者はあまりの怖しさに鋏もとりあえず、一目散に逃げ出した。その話は人々に口伝てで伝わり、それっきり誰もそこの畑には近付かなかった。やがて畑は雑草に蔽われて荒れ果ててしまった。このときから浄蓮の滝の主は美しい女郎蜘蛛だということになり、話おひれに尾鱗がついた。ここに来ると女郎蜘蛛が女の姿で現れ、毒で意識を失わされ、太い蜘蛛の糸で縛りあげられ、滝に引きずり込まれ、挙げ句の果てに食われてしまうという噂が広まり、長い間この滝に近寄る里人はなかったという。何年か過ぎてからのことである。他国から渡って来たひとりの樵夫が、滝頭の脇の大木を伐っていた。滝壺の上に伸びている枝を払おうとして斧をふりあげたが、その斧がするりと手から抜けて、滝に落ち、み

るみる深い滝壺に沈んでしまった。この樵夫は腕っ節が強く、今まで一度もそんな失敗をしたことはなかった。「ちくしょう、しくじった」樵夫は黒く淀んだ滝壺を見下ろした。斧はこの樵夫の命の次に大切なものだった。樵夫は物怖じしない武士<sup>ものふ</sup>だったので、滝壺まで駆け降りると、やおら着物を脱ぎ捨てて谷川の淵に飛び込んだ。夏であるにも拘らず、水は骨身にしみる冷たさだった。底の見えない、深い滝壺である。樵夫は勇気を奮って黒い渦の底に潜って行った。潜れども、潜れども底に届かない。体が冷えてきて、手足が痺れ、動きも止まってしまい、もうこれ以上潜れないと思ったとき、「樵夫よ、樵夫」と、どこかでやさしい女の声がする。そちらに向きを変えると、大きな岩の間から、片手に斧を握った若い美しい全裸の女が現れて、「これは、あなたのものですか」と樵夫に尋ねた。樵夫はその女のあまりの美しさに圧倒されながらも、「うん、確かにわしの斧じゃ」と応えた。「道具<sup>なく</sup>を失しては大変でしょう。返してあげましょう。そのかわりに、ここに留まって私とともに暮らしてください」樵夫は女のあまりの美しさに惹かれて、心が動いたが、その気持ちを押し戻して「いいや、わしは樵夫じゃ。村の衆との約束で木を伐っている。約束があるので、すぐに戻らにゃならん」と応えた。「それでは仕方ありません、この道具はお返ししましょう。でも一つ約束してください。ここで私の姿を見たことを、誰にも話してはいけません。もしも誰かに話したら、そのときは、あなたは永遠に私のものになってもらいます。それでもよいですか？」その言葉に、樵夫は恐ろしくなり、やや後ろ髪を引かれるような気持ちではあったが、何度もお礼を言い、女の手から斧を受け取って、必死に水面まで泳ぎ上がった。気付いたときには、樵夫は片手に斧をしっかりと握って川の浅瀬に横たわっていた。樵夫はしばしボーッとしていたが、やがて大切な斧を手にして山を下りた。あの美しい女のことが樵の脳裏に焼き付いて離れなかった。樵夫はこの出来事を奇異に思い、里の人にこの滝のことを聞いてみると、「昔からあの滝には、女郎蜘蛛が主となって棲んでいるのさ」と口々に言う。樵夫はそのことを聞いて「そうだったのか、あの美しい女が女郎蜘蛛の化身だったのか」と思い、怖さど女の美しい姿への執着に心乱れる思いだった。しかし、あの出来事については口を噤<sup>つぶ</sup>んで決して他言しなかった。やがて樵夫は、この地を去って山から山に渡り歩いた。しかし、あの命の次に大切な斧を見るにつけ、胸の中には、

あのときの怖しさと、妖艶な女への欲望がわき上がり、もつれあって浮かんでは消え、気も狂わんばかりだった。「決して話してはいけません・・・」この言葉が頭の中で繰り返された。「これは、わしだけが知っていることだ」何度も自分に言い聞かせた。しかし、斧が戻ったいきさつは口にせずとも、あの美しい女にもう一度会いたくて、自分の身を持って余してしまう毎日だった。見てはならぬものを見てしまった心の疼きと、どうしてももう一度会いたいという胸焦がす思いに樵夫は、酒浸りの毎日になってしまった。なんとかあの女に会いたいと思い、この里に戻った。その日も仕事を早めに切り上げ、ふもとの酒屋に入って行った。囲炉裏端には、既に樵夫仲間の四、五人が赤い顔をして酔いしれていた。樵夫は仲間に加わった。むかし話に花が咲いていた。いつしか滝の主の恐ろしさについての話になった。樵夫は酒をあおりながら、黙って聞いていたが、次第に酔いが廻るにつれてあの女への思いが抑えられなくなって、とうとう話に口を挟んだ。「俺は滝の主の女郎蜘蛛を見たことがあるぜ。どうだ、誰も見たことないだろうが」と言って一瞬言葉に詰まったが、一呼吸置いて「この目でしかと見たんだ。そりゃあ女よ。それもこの世の者とも思えない美しい若い女さ」と言った。樵夫は勢い余って滝壺での出来事を事細かに話してしまった。樵夫の話に一座はしんとした。この話に、酒場の主人も、後から来た客も、皆、聞き入った。仲間の一人が「そりゃおめー、見間違えずら」と言った。「いや、これはほんとだってば。だがおれは女と誓いを立てて、今まで誰にも話さなんだ」樵夫はひとり酒をあおり、「なんか怖くなってきた。とうとう誓いを破ってしまったで…」と何度も繰り返した。一緒に飲んでいた者達も、空恐ろしくなってきた、それぞれ自分はこのことには関係してないともいう体を装った。誰ともなく「もう、この話はやめるべ」と言いはじめ、次々に酒場を出て帰って行った。囲炉裏火は、一層炎を焚き上げた。樵夫はまた酒をあおり、それから口も軽く滝の主の話を独り言のごとく繰り返した。「酔うた、酔うた。ぐっと胸につかえていた塊りが溶けた。酔うたわい」樵夫は、炉端にそのまま横になって高斟でぐっすり眠りに堕ちた。そしてそのまま深い眠りに落ちて行った。その寝顔は穏やかで、喜び溢れていた。しかし、そのまま目覚めることはなかった。この噂は、あっという間に広がって、ひとびとは「誓いを破った罰が当たった」と口々に言い合った。山で働く樵夫たち

も、里の者たちも、またあらためて浄蓮の滝の主の恐ろしさを思い知らされた。浄蓮の滝の話は今も語り継がれている……はい、おしまい」

「祐子、読み方うまいな。実感がこもっているぜ。何か本当にあった話みたいだ。女郎の執着心かな。一人目の行方不明の人、女性だったよな。女郎蜘蛛が滝壺に引きずり込んだなんてこと、考えられないしな」

「えっ？」

「冗談だよ。……まだ、バスが来るまでには時間があるな」

「あら、来たわよ。きっと一つ前のバスよ」

祐子は小冊子をザックに仕舞いながら、カーブを曲がって来るバスを指さした。バスには大勢の観光客が乗っていた。皆、がやがや話しながら降りて来る。会話の内容からすると、どうやら東京世田谷の婦人会の一団のようであった。それ以外にも2、3の客も乗っていたが、ここでは降りなかった。

「ねえ、ここに来たら、さっきの女郎蜘蛛の話、しちゃだめよ。祟りがあるんだってから」

「そう。お一こわ」

乗客が降りてしまうと、ふたりは急いで乗り込んだ。

「運がいいわね」

「ほんと、抜群のタイミングだな」

バスには地元の人とおぼしき人たちが乗車していた。

「天城峠行くんか？」

一人の老婆が話し掛けてきた。ふたりの服装とザックを見てそう思ったに違いなかった。

「今日は雨になるかもしんねーからき一つけろよ。滑っからな」

「はい、ありがとうございます。八丁池に行くには天城峠で降りればいいんですか？」

「それでもええけんど。水生地下で降りて歩いてもええ。登り口まで昔の街道だし、旧のトンネルから山ん中入れればいい。途中に標識があるしな」

「ありがとうございます」

空はよく晴れていて、少し雲が浮かんでいる程度だ。祐子は、「天気は大丈夫」と信じたかった。

ふたりは水生地下で降りた。そこから道に沿って沢が続いていた。歩き易い砂利道だ。ブナが道の上に覆い被さるように群生している。雲行きが怪しくなってきた道が薄暗くなり、まるで夕方のような感じがした。時々自家用車がふたりを追い抜いて行った。自動車が去ると、急に沈んだ雰囲気になる。祐子はできるだけ賢に寄り添って歩いた。晴れた日の昼間でも少し薄暗く感じられるほど木々が茂っている。しかし都会で生活していると忘れてしまいそうな自然の息遣いを意識できるのも確かだった。

「何も考えないで歩くのは素晴らしいな」

「うん。私は賢くんと一緒だから、それだけで楽しい」

祐子は歩きながら、賢の顔を覗き込んだ。

15分ほど歩くと、旧天城街道のトンネルの入り口に辿り着いた。右手に休憩所がある。ふたりは少し休んで、山行計画の確認をすることにした。トンネルの右上に勾配の急な山道が見える。賢はそこを登るんだなと思って祐子の方を振り向くと、祐子はベンチに腰掛けて、右の膝頭を擦っていた。

「この辺りには、変な話があるのよ」

「変な話って？」

「このトンネル、夜になると亡霊が出たり、変な光が見えたりするみたいよ」

「ふーん、そうか。確かに、何となく圧迫感があるよな。この道は踊り子街道だろ。その頃からあるのかな」

「主人公と一緒に移動していた楽団の長老は重病だったそうよ。川端康成はそのことを書かなかっただけ。その時の苦しみが苦悶の念になって残っているって話もあるのよ。トンネルの石積み工事の時に事故で死んだ人が亡霊になっているなんて話もあるようだし」

「祐子、浄蓮の滝で少し疲れたから、今日はここからトンネルを抜けて、

七滝の方に行ってみようか？」

「八丁池は止めるの？」

「うん、おまえの足が心配だから・・・それに何となく雨が来そうだから、もし滑ったら足を痛めてしまうだろう。この道を歩いていると、なんか超自然的なものを感じるんだ。もう暫く歩いて行きたいし、意識が一層はっきりしてくる」

「優しいね。私は大丈夫なんだけど・・・いいわ、七滝に変更。じゃ、ここでお昼にしようよ」

祐子はザックを下ろし、籐のランチボックスを取り出した。海苔でくる包んだ握りめし4個と卵焼き、ウインナーソーセージ、そのほかカラフルな野菜類が、美しく配色してきちんと詰めてある。賢は自分のザックからペットボトルの緑茶を二つ取り出した。修善寺駅で買ったものだ。と、その時、不意に賢には祐子のにぎりめしを握っている姿がズームアップして見え、次の瞬間、見知らぬ女性の顔が浮かんだような気がした。

「頂きます」

共鳴したようにふたり同時に言った。あまりにぴったり同期したので、ふたりは顔を見合わせた。

「わたしね、初めてよ、こんなに胸が弾むの・・・」

祐子は賢の方に少し身を寄せた。賢は会釈して、

「おれも、とても楽しいよ。弁当大変だったな」

と言うと同時に、前につんのめった。何かに背中を突かれた感じだった。

「どうしたの？」

「いや、何でもなし・・・」

賢は説明しなかった。ふたりは、時々顔を見合わせながら、食事をした。食事を終わると、ふたりは休憩所を出て登山口に向かわず、直ぐトンネルに入った。空気が急に変化したと思った。夏なのに、肌に感じた冷気が肉を突き抜けて、骨にまで達してくる。背筋が次第に冷えてゆくのを感じ始めた。祐子は賢の左腕にしがみついて歩いた。賢は次第に周囲が見えにくくなってきて、前方に見える出口の光が遠ざかってゆくような感覚に襲われてきた。暗く、足下のじとじとした感覚が、トンネルの中

の空間全体に広がってゆくような気がする。そのとき、背後から1台のベンツが近付いて来た。スピードが出ている。速度を落とすだろう思いながらも、賢は背中が触れるほど体をトンネルの壁に寄せ、同時に祐子の手を思い切り引いた。祐子は賢の腕の中に抱かれた。ベンツは目前までほとんどスピードを落とさずに来た。ふたりは危険を感じたが、ベンツはふたりの前を掠め、そのまま走り去った。ヘッドライトも点けていなかった。祐子はしばし賢の腕の中にいたが、やがて賢が祐子を放すと、再び賢の左手にしがみ付いた。賢はやおら壁から離れようとしたが、体が壁に張り付いたような状態で動けない。

「ねえ、早く出ようよ」

祐子の声で、賢は体を壁に引き付けている力から解放された。それはまるで、「彼を離しなさいよ」と言う祐子の声で解放されたかのような感覚だった。賢には、祐子があたかもスポットライトを当てられているように、明るく輝いて見えた。ふたりは早足で出口に向かった。トンネルを出る頃には、足の爪先から腰のあたりまで、すっかり冷え切ってしまった。ふたりは急いでトンネルから離れた。

「祐子、おまえがいてくれて救われたよ。今、何かに壁に引き付けられているようになっていて、動けなかったんだ。おまえの声で縛りから解かれたようだ」

「気持ち悪いわね、何だか異様な雰囲気だし」

「トンネルの中は別の次元との接点があるような感じだ、と言うより、時空が歪んでいるような感じだな。何となくボーッとした感じで、ジトジトしていて気持ち悪いな」

踊り子街道はそこからまた砂利の道になった。トンネルの冷気と砂利道を覆う木立の陰で、夏のような感じはしなかった。雲が広がり日差しは全くなくなっていた。ふたりは足早に旧街道を進んだ。やがて、踊り子歩道二階滝口のバス停に出る頃に、雨がぽつぽつ落ち始めた。街道は異様な暗さになった。ふたりは慌ててザックから雨具を取り出し、上着の上からレインコートを着て、スパッツを穿いた。雨脚は次第にその強さを増してきた。ブナの枝に遮られて、雨は不規則にふたりの上に降り注い

だ。雲行きもよく分からなくなった。雨はいよいよ激しくなり、ついに土砂降りになった。

「傘、持って来ればよかったね」

ふたりはやっとの思いで下田街道に出て、バスを待った。雨脚が強くなっている。5分と待たずに修善寺行きのバスが来た。賢は祐子に向かい

「とりあえず浄蓮の滝まで戻ろう」

と言った。

「うん」

ふたりはバスに乗り込んだ。浄蓮の滝まではほんの5分ほどだった。バスを降りた時は雨が上がっていた。いや、よく見ると雨の降った形跡もなかった。

「通り雨みたいね」

「山の天気さ。天城も奥に入ると、もっと天気が変わり易いんだ」

ふたりは雨具に残っていた水滴を拭い、雨具を脱いでそれぞれのザックに入れた。

「すみません」

賢の後ろからひとりの40歳ほどの小太りな女性が声を掛けてきた。

「東京の方でしょうか？江東区からいらした」

「はい」

祐子は、どうして分かるんだろうと思った。

「あなたとは一度お会いしているんです。さきほど」

「あっ、そうですか。申し訳ありません、私は・・・一寸」

さっきバスから降りて来た婦人のグループの人かなと思ったが、賢には覚えがなかった。

「先ほど滝壺の所で、若い女性の方に頼まれたのです。これをあなたに渡して欲しいって」

女性は一冊のノートを賢に手渡した。

「どんな方ですか、その方？」

「私も存じませんが、綺麗な人でしたよ。あなたがバスでこちらにいらっしやるからおっしゃっていました。なんでもその方は、どうしても

戻らなければならない用事があるからと。私も初めは断ったのですが、何度も頼まれるので止むを得ず引き受けたんですよ。では確かにお渡ししましたので、私はこれで」

賢は成り行きをよく理解できずに礼を言った。その女性は観光センターの方に歩いて行って、店の中に消えた。

「賢くん、何それ？」

祐子は興味深そうにノートを見つめている。賢はそのノートを開いてみた。1ページ目にひらかなで「おもいで」と書かれている。次のページには、詩のような、文章が書かれていた。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た

街の冷たい水のしたたりが

私の魂を凍らせてゆく

空は青、大地は緑に、血の色は赤、

水は透き通って久しく

それでも、私の中を巡る

彷徨える心は

わたしから離れ

あなたを求め

こなた、かなたを追いかける

いまあなたに巡り逢い

心は戻り

私の内なる太陽は

麗しき壱子を産み落とす

あなたは幣を手に

静かな鏡面に祈る

瞳からひと滴の涙が落ち

波は無限に広がる

辺り一面

花が咲き乱れ、

ふたたび時は流れはじめる

ああ

「なんか抽象的な詩ね」

「うん・・・なぜ俺に・・・祐子、もう一度浄蓮の滝に降りてみないか？」

「いいわよ。だけど、一寸不安ね」

賢は祐子を気遣って、階段を10段前後降りるたびに、大丈夫かどうか確認した。ふたりは再び滝壺の前に着いた。小冊子を賢に渡すように頼んだ女性を捜したが辺りは40歳を過ぎた人たちばかりで、若い女性の姿は何処にも見当たらなかった。午後になり、日差しもやや強まっていた。先ほどの雨が嘘のように感じられた。

「やはり、いなかったわね」

賢は無言で滝を見つめていた。祐子は山葵売店の方に行き、店番の70歳前後の老翁に若い女性のことを聞いた。

「おじさん、済みません、さっき若い女の人を見ませんでしたか？」

「いいや、おりゃあ、知らにゃあ。若い娘はいつぴゃあ来るら」

「その人、中年の婦人に手帳を預けていたんですが・・・」

「わりーけんど、わかんにゃあな」

祐子は無理だと思い、礼を言った。

「でも、おかしいわね、まさか、滝の中に消えたなんてことはないでしょうに・・・あの滝の裏側はどうなっているのかしら？ ただの磐の窪みかな？」

祐子が賢の佇んでいた方を見たが、賢の姿は無かった。辺りを見回したが、何処にもいなかった。

「賢くーん！ 賢くーん！」

何度も賢を呼ぶ祐子の声色は次第に上擦ってきた。祐子は滝見の周辺から、山葵田の辺りまで店の中や脇道を覗いたり茶屋まで戻ってみたりしてから、膝の痛みも忘れて2度観光センターとの間を往復した。滝壺も覗いた。ジョウレンシダの群生の中も、山葵田の中までも覗いて廻った。

かれこれ半時間ほど辺りを探して歩いたが、どこにも賢の姿はなかった。祐子の頬には涙が伝わって落ちた。

「賢くん・・・・・・・・」

祐子が茶屋から滝に向かって下って来た時、滝見の端からこちらを見ている賢の姿が見えた。

「おーい、祐子ー！」

「賢くん！」

祐子は石段を駆け下りて賢の胸元に飛び込んだ。涙が止まらなかった。賢は祐子の肩を抱きながら言った。

「どうした祐子」

「また、いなくなっちゃったんだもの」

「えっ！ほんとか!? 今、あの滝の左側を見ていたら、ボーッとしてきて、気が付いたら祐子、おまえがこっちに向かって来たんだ」

賢は祐子にここでの出来事を伝えたかった。すすり泣いている祐子を抱きながら、心の中で祐子に語り掛けた。

「あの人に会ったんだよ。あの1番目にいなくなった人だよ。俺、じつと滝裏の左側を見ていたら、この柵の向こうに滝裏の窪みに通じる道があるのに気付いたんだ。一寸見え難いけど、その窪みからその道をひとりの女性がこちらに向かって歩いて来たんだ。そんなことあり得ないのに、不思議とおかしな感じがしなかったんだ。祐子、君もそこにいると感じていたし。だから、その女性にいなくなった時のことを聞こうと思って、ごく自然に「どうしたんですか？」て聞いたんだ。そしたら、彼女は静かに微笑んで「お待ちしておりました。わたしは、かなり前からここに棲んでいるんです」って言うんだ。「一人きりでおりますので、いつも、ここを訪れるいろいろな人に話し掛けるんですが、どなたも応えてくださらない。さっき、私を見ている女性がいると気付き、こちらに参って、その女性の方に話し掛けたのです。女性は応答してくださいました。その方に、お手元にあるノートを貴方にお渡し頂くようお願いしたんです。ひとりで寂しいので、一緒にここにいてくださいますか？」って言うんだ。で、俺は「そうはいかない、俺はそこにいる祐子

という女性とここに来ている。彼女と共に東京に戻る」と言ったら、「それでは、仕方ありません。その手帳をあなたに差し上げます。ここに、私たちの秘密を解く鍵が書かれています。私は都会に生活していて、いろいろな手段を使って問題を解こうと致しましたが、どうしても解けませんでした。もう一步のところだと思います。わたしの都会にいた時のおもいでを綴ったのがこのノートです。ここに問題と、それから、わたしが思う鍵を書いておいたのですが、ついに時間がなくなってしまって、ここに戻ることになりました。で、あなたなら、この秘密を解くことができるかもしれないと思いました。危険過ぎるので誰にでも分かる文章で書くわけにはいかないのです。秘密が解けたときは、絶対他の人にそのことを話さないでください。そして、あなたにその結果を実行して頂きたいのです。たとえあなたの大切にしている人に対しても、ここでの出来事は勿論、解けた秘密のことも絶対話してはいけません。もし、あなたがそのことを他の人に告げたら、その時はあなたは永遠に私のものになって頂きます」とここまで彼女が言い、俺が、先ほどのノートを開こうとしたら、祐子、君の声がしたんだ。その時まで、おまえはそこにいると思っていた。おまえの声の方に振り向いて、また、彼女の方を振り返ったら、さっきまであった道が消え、彼女もいなくなっていたんだ。だからおまえには直接話せない。俺の心を読んでくれ

賢が話し終わっても、祐子は賢の胸に抱き着いて離れない。

「わたし……」

賢は祐子の耳元で囁いた。

「大丈夫だ祐子、俺を信じていろよ。でも、祐子はこのノートには触れない方がよさそうだ。それに、このことは誰にも話しちゃだめだぞ」

賢は近くにいる中年の男性がふたり、こちらを見ているのに気付いたが、確かに祐子と暫くの間抱き合ったままだったので、変に感じたのだろうと思った。しかし賢が視線を向けると、ふたりとも滝壺のほうに目を逸らせた。賢はそっと祐子を放した。

「でも、不思議だな。祐子から俺が見えなくなっているとき、どうして、俺から祐子が見えていたんだろう。尤も、見えていたと謂うより、そこ

にしていることが分かっているという感じだけど。だけど祐子以外のもののことは分からなかったな」

祐子は左手の甲で涙を拭いて

「ねえ、もう一度やってみて。わたし見ているから」

「そうだな、一寸試してみるか？」

中年の男性が立ち去るのを待ってから、賢が言った。

「祐子、いいか、今から注意を滝壺に持ってゆくからな」

「一寸待って、カメラを用意するから」

祐子は急いで、デジカメを構えた。

「いいか？」

「うん」

賢は意識を集中させて、滝裏の左側の窪みを見続けたが、何事も起こらなかった。祐子は滝を背景に、賢の写真を3枚撮った。そのとき、ひとりの24、5歳の青年が写真機を片手に滝見の方に近付いて来た。

「あの、写真を撮って頂けませんか？」

祐子はデジカメをその青年に渡して、賢の腕を抱きかかえた。賢はそのまま動かなかった。

「いいですか？じゃあ撮りますよ」

・・・カシャッ

「ありがとうございました」

祐子の声に合わせて、賢も頭を下げた。その青年も滝に向かって一眼レフカメラのシャッターを切っていた。

「もう、戻ろうか？」

「うん」

「祐子、足は大丈夫か？」

「大丈夫、さっき2度も上まで行って来たから、治っちゃったみたい」

ふたりは途中休憩を入れながら、一層急勾配になったように思える石段を上った。上り切る頃には、日差しが強くなっていた。

「おめ一、帽子にゃあきやら、ひずるしいら？あん茶屋いくべえ」

老婆が一人の少年を連れて峠の茶屋と看板の出ている茶屋に入って行

った。賢は吹き出してしまった。

「ねえ、わたしたちも休まない」

「そうだな、疲れただろう？暫く休んでいこうか」

ふたりは峠の茶屋に入った。

「いらっしやいませ。何になさいますか？」

祐子は抹茶を頼んだ。

「僕はコーヒー」

「かしこまりました」

「賢くん、こういう所ではお茶なんかを飲むものよ」

賢は戻り掛けたウエイトレスに向かって呼びかけた。

「済みません、僕も抹茶にしてください」

「はい、かしこまりました」

祐子は賢と同じものを頼みたかった。その方が恋人同士に見えると思った。時計は午後3時少し前だった。

「わたし、疲れちゃった」

「俺もだ。もう帰らなくちゃな。東京までは時間かかるし」

ふたりは暫くボーッとしていた。

「お待たせしました、お抹茶です。こちらはお茶菓子です」

祐子は10センチほどもある信楽焼きの湯飲みを両手で持ち上げると、かすかな音を立てて抹茶を啜った。賢は祐子を可愛いと思った。「この娘を悲しませてはいけない」と思った。

「ごめんな。随分心配させちゃって・・・疲れたろう」

「ううん、一緒だから大丈夫」

「祐子、今日は湯ヶ島に泊まっていくか？」

祐子の顔がパッと明るくなった。

「ほんと!?! じゃあ宿を取らなくちゃ!」

祐子は茶碗をテーブルに置くと、

「一寸待っていてね、私、調べて来る」

と言って席を立ち、スマホを手にして小走りに外に駆けだして行った。

そして暫くしてから戻って来た。

「宿取れたわよ。湯ヶ島の河合楼って旅館よ」

「いつも祐子には感心するな」

「運が良かったのよ。さっきの天城峠の土砂降りで、今日の宿をキャンセルした人がいるの。怪我しちゃったらしいのよ。すぐに帰ったらしいわ」

「それにしても、本当に手際がいいな」

「天気が良くなってよかったわね。浄蓮の滝で何か分かった？ どうして賢くん、時々見えなくなるのかしら？ あの時もあそこにいたんでしょう？」

「そう思うよ・・・何かに集中して、完全に思考が止まっている時に何かの力が働くと、この空間からは見えなくなるみたいだ」

「でも、ボーッとしていても、なんの力も働かなかつたら見えなくなるのかしら？ さっきも何かの力が働いたのかな？」

「うん・・・分からない」

「まさか、女郎蜘蛛じゃないでしょうね。ああ怖い」

そう言って祐子は首をすくめた。

「そうかも知れないよ。分からないけど」

賢は心の中で語ったことが、祐子の心には伝わっていないことを知り、ほっとした。深層意識で感じてくれていればいいと思った。賢は暫く思考を止めて静かに祐子を見つめていた。祐子は抹茶の茶碗をいじりながら、時々賢の方を見ては、目が合うと少し微笑んでそして顔を赤らめていた。祐子が口をきいた。

「そろそろ宿に行こうよ」

「もうそろそろ4時だからいいかな。明日、祐子の足の具合が良かったら、八丁池に行ってみようか？」

「やった！ わたしなら、大丈夫よ。今日の階段、最初ハッスルし過ぎたのよ。だから、明日は絶対大丈夫」

「そうか、よかった。じゃあ、明日は頑張ろう」

ふたりは峠の茶屋を出て、停車しているタクシーに乗った。そこから河合楼まではほんの5分程度だった。宿に着くとすぐチェックインカウン

ターに向かった。受付の女性は微笑みを浮かべて対応してくれた。

「先ほどお電話頂いたお客様ですね。確かに伺っております・・・それではこちらにご記入ください・・・ところで奥様、夕食はどうなさいますか？お部屋にお持ちすることもできますし、皆様とご一緒でも」

祐子はチェックインカードになにやら書きながら、賢の方を振り向いた。賢は祐子に

「みんなと一緒にいいよな」

と言った。祐子はチェックインカードをさっと女性に渡し、

「じゃ、みんなと一緒に」

と応えた。

「かしこまりました。お部屋は303号室になります。その階段を上がって3階の3番目のお部屋でございます。こちらがお部屋の鍵でございます。電子キーになっております。お風呂はいつでもお入りになれます。男湯、女湯はいずれもそこを通り抜けて、奥でございます。夕食は午後7時からになります、9時までお召し上がり頂けます。この下の菊の間になります。何かございましたら、お部屋の電話でフロントにご用命ください」

受付の女性はせせらぎを流れる水のような淀みの無い声で説明した。賢はふと、一部屋しか予約していないことを知り、女性に尋ねた。

「あの、一部屋ですか？」

「はい、生憎、一部屋しか空きがございませんでしたので、奥様にそのように申しあげましたのですが、よろしいと伺いましたもので」

祐子が賢の方を見ずに、

「いいでしょうあなた」

と独り言のように言った。

賢はその場の雰囲気から「うん」と言わざるを得なかった。鍵を受け取り、ふたりは部屋に向かった。

「祐子、俺たちは夫婦ということになっているのか？」

「そうよ、あなた」

「おい、本当に同じ部屋に泊まるつもりか？」

「大丈夫よ。わたし、賢くんなら大丈夫、いつでも」

「分かった」

祐子は極めて冷静な賢の言葉を、一寸不満に思い、意識的に賢の左手に自分の右手を絡めた。賢もそれをふり解<sup>ほど</sup>こうとはしなかった。

扉を開くとすぐ左手に下駄箱があり、その上に赤いバラが一輪飾られていた。入り口左手にトイレと洗面所、部屋風呂が設けられており、その領域と居室とは襖で仕切られている。よくある旅館の造りだった。居室はまだ新しい12畳ほどの部屋で、入り口のすぐ左手に造り付けのクローゼットがあり、その前の四角い黒塗りの盆に2人分の浴衣と丹前、帯、そして歯ブラシとタオル、バスタオルがきちんと揃えてあった。部屋の中央には座卓があり、丸い盆の上にはポット、湯飲みのセット、猪の形に造った猪最中と書かれた茶菓子二つが包装紙に包まれたまま菓子皿に盛られていた。窓際はベランダになっており、部屋とは障子で仕切られていた。ベランダには小作りの安楽椅子とテーブルが置かれており、左側の端の壁に鏡が掛けてある。その下はシンクになっていた。反対側には白い小型の冷蔵庫が設置されていた。窓の外には沢の水の音が聞こえ、向こう岸に古めかしい建物が何棟か建っている。緑の木々に覆われた山肌が古い建物を引き立てていて、赴きある風情を作り上げていた。

「いいお部屋ね」

「うん、なんか、新婚旅行みたいだな」

ふたりは背負っているザックを下ろした。祐子は、茶の支度をしながら言った。

「あなた、お茶頂きましょう」

賢は何事もないように、同調して応えた。

「いいところだな。ふたりで泊まれるなんて素晴らしいな」

賢が祐子の向かいに座って湯飲みに手を掛けたとき、ノックの音がした。

「ごめんください」

45歳前後の仲居が入って来た。仲居は畳に両手を着いて挨拶してから、一通り部屋とホテルの施設の説明をして、浴衣のサイズを聞いた。

祐子はにっこり笑って応えた。

「ええ、主人は大、わたしは中で大丈夫です」

まるで妻のような話しぶりだ。

「お食事をされている間に、床の用意をさせていただきます・・・お客様、外の沢は猫越川と本谷川が出合って、狩野川の始まる場所なんです。こちらは新館ですが、本館の方は国の文化財に指定されているんです。それでは、ごゆっくりお過ごしくださいませ」

「ありがとうございます」

祐子は胸をどきどきさせながら頭を下げた。賢も祐子に合わせて会釈をした。仲居が出て行くと、ふたりは顔を見合わせて吹き出した。

「私たち、本当の夫婦のように見えるのね」

「うん・・・少ししたら、お風呂に行こうか？」

「そうね、でも、まず貴重品を金庫に入れて、雨合羽とスパッツを少し干した方がいいわ。明日の確認もしておきましょう。寛いじゃうと、きっと忘れちゃうわ」

まず賢が祐子から財布と時計を受け取り、自分の財布とともに金庫に入れた。説明書も読まずに、さっと金庫にしまう賢の姿を観て、祐子が

「賢くん、説明書読まなくても大丈夫？」

と聞いた。賢は

「読んだよ」

と応えたが、祐子には賢が読んでいるようには思えなかった。ふたりは、まだ濡れている雨合羽とスパッツをザックから取り出すと、スパッツをベランダのタオル掛けに2枚並べて掛け、ハンガーを外してきて、雨合羽に通し、障子の上の棧に二つ並べて掛けた。

「これお揃いなよね。覚えている？」

「忘れるわけないよ。初めての山行だったんだから。雨具も無しによく行ったもんだ」

「そうね、あの後が大変だったわね」

「おれは、祐子が助かったんで、これで自分もこれからも生きていてもいいんだと思ったくらいだ」

祐子の目が潤んできた。

「お風呂に行こうか？」

「私は後にするわ。食事してから」

「そうか、じゃ、俺はとりあえず汗を流して来るよ」

賢は浴場に出掛けた。流石にこの辺りでは指折りの旅館だけあって、男湯の湯船は大きく、洗い場の新しさが心地良かった。賢はまず体と髪を洗った。その後でゆっくり湯に浸かろうと思った。湯は少々熱目だが、疲れがすーっと抜けてゆくような心地良さだった。雰囲気も造形美を極めていた。賢は今日の出来事を自分の意識の動きに沿って逆に辿ってみた。初めに思い浮かべたのは祐子であった。ついさっき初めての山行の話になった時だ、祐子は涙ぐんでいた。賢は意識を切り替え、山行時の祐子の心の動きを追った・・・秋の紅葉の美しい時期だった。地元のハイキングクラブ主催の登山に数馬、祐子、亮子と4人で参加した。大菩薩峠だった。大菩薩峠から大菩薩嶺にさしかかった頃、小雨が降り出した。ハイキングだったので先頭のグループは既に大菩薩嶺の頂上付近に着いている模様だった。4人は話しながら登って行った為、大分遅れていた。そのとき、亮子が「もう、下りたい」と言い出した。祐子は登りたかった。そこで、数馬と亮子、賢と祐子の2組に分かれ、数馬たちはそこから引き返した。そのことをツアーコンダクターに伝えることもあり、賢と祐子は大菩薩嶺の登山を強行した。雨具も持参していないのに大した雨ではないと思ってしまった。それがいけなかった。頂上も近くなるとき雨が激しくなり、風が強まった。ふたりは必死に登った。4人は登山を甘く考えていた。賢と祐子は全身がびしょ濡れになった。それでも登り切るしかなかった。風が冷たくなり、体の動きが悪くなった。祐子は寒さに震え始めていた。賢は自分の上着を脱ぎ、祐子に掛け、必死に祐子の手を引き、やっとの思いで頂上に辿り着いた。祐子の顔色は蒼白くなっていった。賢は祐子を背負うことにした。祐子の体の冷たさが伝わってきた。まずいと思ったそのとき、駆け付けた救護隊に巡り会えた。救護隊は直ぐに雨を凌ぐ簡易テントを張り、賢と祐子の中に入れて、祐子の衣類を全部脱がせ、タオルで拭くように言って賢に乾いた

タオルを渡した。祐子はほとんど意識がなかった。賢は祐子の体をタオルで拭いた。祐子の体は冷たくなっていた。乾いていたタオルもすぐにぐっしょり塗れた。賢は絞っては拭き、絞っては拭いて水分を除き、体を温める為にすぐに救助隊の持参した毛布で祐子を包んだ。祐子の体は白くなってしまったかに見えた。賢は神に祈った。祐子の命を自分の命と入れ換えてほしいと願った。そして、自分も生き抜くと誓った。救急救護隊は毛布に包まれた祐子の口に白湯を含ませるように賢に指示した。賢は口いっぱい白湯を含み、祐子の唇から注ごうとしたが、祐子は歯を食いしばって口を開かなかった。賢は救急隊の指示に従い、祐子のあごを引き、口移しでなんとか湯を注ぎ込んだ。救急救護隊は祐子を寝袋に入れ、ヤマを駆け下りた。賢も共に駆け下りた。山の下には救急車が待機していた。祐子はすぐに病院に運ばれたが、そこで漸く意識を取り戻した。賢は泣いた。あまりのうれしさに泣き崩れた。医師に暫くは安静にするように言われ、賢はその夜、徹夜で祐子を看病した。ツアーコンダクターと、知らせを聞いて駆け付けた数馬と亮子も付き添うと言ったが、先に戻って賢と祐子の会社に報告しておくことを依頼して無理に返した。賢は一睡もせず祐子を看護した。祐子の体は夜半過ぎに漸く暖かくなってきた。夜勤の看護婦が回診し、もう大丈夫だと言った。祐子の目に涙が浮かんでいた。さっき宿で見せた涙はそのときの涙だと思った。祐子は賢の手を取って床着の上から自分の心臓の上に持って行った。祐子の体の暖かさが床着の上からも感じられた。脈は規則正しくしっかりと打っていた。祐子のふくよかな胸の感触が賢に伝わってきた。賢は祐子を抱きしめてあげたいという衝動に駆られる自分を押さえていた。祐子の髪に触れ、安心して眠るように諭した。それから30分ほど祐子は賢の手を握っていた。そして眠りに落ちた。賢は朝まで、祐子の顔を覗いながら起きていた・・・賢はここで再び意識を旅館の部屋に戻した。涙ぐむ前に祐子は雨具を干した。祐子が2人分の雨具を干している姿と、それを見て祐子を愛おしく思っている自分が見えた。その前は祐子に説明書を読んだかと聞かれている自分が見えた。確かに自分は説明書に目を通した。かなりじっくり読んだと思っていたが、どうして

祐子が読んでいないと思ったのかと不思議に思った。その前の強い意識の動きは部屋に入る前だった。祐子が自分の左手に右手を絡めた。賢は胸のときめきを感じた。祐子を可愛く思った。その前は峠の茶屋だ。湯ヶ島に泊まろうと言ったときの祐子の喜びの感情が強い波のように自分の胸に押し寄せて来た。その前は滝壺で祐子が泣いたときだ。祐子を抱きしめながら、思考の言葉を通して祐子に真実を伝えようとしている自分の姿が映し出された。その前が大きな精神的波動のずれだ。1番目の失踪者の女性との会話だ。女性の姿が眼前に浮かんで来た。あのときは確か、姿を見ていたようでよく見ていなかった。どうして、1番目の女性と確信できたのだろうかと思った。今イメージしようとする薄いレースを羽織った天女のような姿が浮かんでくる。レースから体の線が透けて見える。こちらを見て微笑んでいる。とても美しい。この世のものとも思えない妖艶な姿に思えた。賢は約束のことを振り返り、部屋に置いてきたノートを読み浮かべた。祐子に読ませてはならなかった。賢は急いで湯から上がると、浴衣を着て、着替えた服を丸めて抱え部屋に急いだ。祐子は浴衣に着替え、テレビのニュースを見ていた。

「お風呂どうだった？」

「うん、すごくよかったよ」

賢はザックの中をごそごそ探した。自分のノートはあったが、預かったノートは見当たらない。祐子に訊いてみた。

「あの預かったノート知らないか？」

祐子はテレビのニュースに聞き入っていて、唯「ううん」と応えただけだった。賢はもう一度身の回りを探し廻った。

「どうしたの、ノートないの？」

「うん、何処にも見当たらない。金庫には入れてないし」

「きっと出てくるわよ」

賢ははたと困った。絶対紛失してはならないものを紛失してしまったと思った。もしこのまま出てこなかったら明日もう一度、浄蓮の滝に行ってみよう思って意識を切り替えた。

「賢くん、食事に行こうか？」

「そうだな」

ふたりは食堂に降りた。既に大勢の客で賑わっていた。仲居が寄って来た。

「お部屋番号は何番ですか？」

「303号よ」

祐子が応えると、窓際の席に案内された。テーブルの上に「内観様ご夫妻」という案内札が置いてあった。係の者がやって来た。

「ただいま料理をご用意致します。お飲み物はいかが致しますか？」

賢が「あの一」と言い掛けたが、祐子が遮って言った。

「いえ、とりあえず結構です。今晚資料のまとめもあるし・・・お酒は飲めないのよね、あなた」

「そうか、わかった」

賢は微笑んだ。食事はとても素晴らしかった。特にこの地方特産と見られるワラビや山ごぼうなどの山菜をあしらった煮物は、胡麻の風味を感じる独特の味だった。ふたりは今日のことを話しながら箸を進めた。食事を終えたのは8時過ぎだった。部屋に戻ると、座卓がベランダ側に寄せられ、2組の布団が敷かれていた。祐子は鼓動が激しくなるのを覚えた。2つの布団はほんの30センチほどしか離れていない。

「布団を離した方がいいだろう、おれ今日のことまとめるよ」

賢は部屋奥の布団を座卓いっぱいまで引いて二つの布団の間を1メートルほどに開けてから、ザックを手にして座卓の端に座った。ザックの中をごそごと探してノートとペンを取り出し、座卓の上に置いた。首をかしげながらまだごそごと中を探している。

「わたしも一緒にまとめたい」

そう言って祐子は座卓の近くに寄ったが、縁に陣取れないと知ると、賢の後ろに回り、膝立ちになり、背中越しに賢の開いているノートを覗き込んだ。心臓の鼓動が息苦しくなるほど早く、激しくなっている。

「賢くん、今日、いろいろ書いていたね」

「うん、心と意識の動きを記録していたんだ。それと感情の動きもな。そのときに周りの事象がどう変化したか、しなかったかを記入していた

んだ」

「ふーん」

そう言いながら、祐子は賢の背中にもたれ掛かった。

「どうした？」

「何でもない。わたし、お風呂に行ってくるわ」

祐子はそっと賢から離れた。

「うん、それがいい。その間俺はこれを整理するよ」

祐子は自分のザックの中を探して、化粧道具を取り出し、備えの手ぬぐいとバスタオルを手にして浴場に出掛けた。風呂には誰も入っていないかった。祐子は「まだ皆、食事中なのかしら」と思った。軽く体を洗ってから、湯船に浸かった。今日一日のことが思い返された。どうしても浄蓮の滝で賢がいなくなったことと、賢に渡されたノートのこと、心に引っ掛かっていて離れない。祐子は賢が入浴している間に、賢のザックからそのノートを抜き取り、玄関の下駄箱の奥に隠した。後で賢を驚かそうと思ったのだが、あの滝壺で賢が見えなくなってからというもの、伊豆の民話に出て来る女郎蜘蛛の化身のような美女のことが気になって仕方がない。「そうだ、今日は思い切ったことをしてみよう」と考えた。一旦湯船から上がると、祐子は体と髪とを3度丁寧に洗い、再び湯船に浸かった。一人の20歳前後の女性が入浴して来た。とても美しいプロポーションの女性だった。顔立ちは細面で、小鼻、目尻が上がり気味だ。祐子は「プロポーションはわたしとどっちがいいかしら？顔は絶対自信あるわ」と思った。祐子はプロポーションにも自信があった。自分のアパートではいつも体型を気にして軽いフィットネス運動をしている。浴場に行くとき自分の全身を見て、その成果を確認するのが楽しみだった。湯から上がると、脱衣所にある大型のミラーの前で全身を映してみた。祐子は「よし」と確信を持った。バスタオルで全身を拭くと、何も身につけずにゆかたを羽織り、帯を締めた。急いでシンクで下着を洗うと、それをバスタオルに包み、浴衣の裾が開かないように注意しながら部屋に戻った。

「ただいま！」

祐子は声を掛けて中に入った。襖はさっき入浴に出掛けた時のまま閉まっていた。祐子は扉を閉めると鍵を掛けた。今洗った下着を洗面所のタオル掛けに、その横にバスタオルを掛けて、目立たないようにした。そして、入り口に戻ると下駄箱の奥から、さっき隠しておいた例のノートを取り出した。胸の鼓動が高鳴ってきた。ちょっと悪戯が過ぎるかと思ひ躊躇したが、思い切って浴衣の前を少し開けた。胸の鼓動が早鐘のように激しくなってきた。祐子は大きく2度深呼吸をして、左手にノートを持ち、襖を開けた。賢は記録ノートに何かを書き込んでいる最中だった。祐子は後手で襖を閉め、一歩前を出た。賢は祐子が部屋に入って来たのに気づき、ペンを置いて、

「おかえり、どう・・・」

と言い掛けて、息を呑んだ。

そこにはオレンジ色に輝く妖艶な祐子の姿があった。透き通るように美しく、温泉の香りが漂ってくる湯上がりの遊女のようなようだった。祐子は輝いているように見えた。顔は少し紅潮し、目を大きく見開いている。開けた襟の間からふくよかな乳房のふくらみが覗いていたが、その立ち姿は少しも卑猥さを感じさせなかった。賢は自分の血が沸き立つような感覚を覚えた。今まで祐子を見てこんなに感情が沸き上がったことはなかった。祐子は賢から視線を逸らせて、部屋と縁側を隔てる障子の上の欄間を見つめながらノートを手前に翳し、ゆっくり話した。

「あなたの探していたものはこれですか？わたしはこれが何かは分かりません。中も見ておりません。もしこのままここに、わたしとずっと一緒にいてくれたなら、これをお返ししましょう」

「祐子！おまえ女郎蜘蛛の・・・」

賢のうわずった声にも構わず、祐子は続けた。

「それが駄目でしたら、それでもこれはお返し致します。その代わり、ここでの出来事は絶対、誰にも話してはいけません。もしあなたが、誰かにこのことを話したら、あなたは永遠にわたしのものにならなくてはなりません」

賢には祐子が昼間浄蓮の滝で見た早瀬由美の姿に重なって見えてきた。

しかし祐子にはほんの僅かな陰も感じず、輝いて見えた。顔は頬が薄桃色に染まり、大きく見開いた目に心なしか涙が光っている。賢は感動し目頭が熱くなってきた。

「わかった、ずっと一緒だよ」

賢はそう言うと祐子に近づいて、ノートを受け取った。祐子は咄嗟に賢に抱きついた。祐子の心臓の鼓動は一層激しくなった。抱きついている祐子から意識を外して賢は言った。

「祐子、おまえ、すごくきれいだ……あの菩薩峠でおまえが生死の境にあったとき、おれは神に祈った。そしておまえの命を救ってくださったら、おまえと共に一生を生き抜くことを誓った。だからこんなことをしなくても……」

祐子は涙がこみ上げてきた。そして、さらに強く賢に抱きついた。ふたりは暫くそのままの状態でした。賢は祐子の湯上がりの微かな石けんの香りと、肌の温もりが自分の身体に流れ込んで来るのを感じた。賢はこれ以上意識を逸らしていることは難しいと感じ、祐子の両腕を取って引き離すと、ノートをテーブルの上に置き、目を瞑って言った。

「祐子、浴衣を直せ！」

祐子は一瞬たじろいだが、急に恥ずかしくなって、くると賢に背を向けると襖を開け、駆け出して行って洗面所のシンクの前に立ち、鏡に映った自分の姿を見つめた。祐子は自分のしたことを思うと顔が熱くなってきた。心臓の激しい鼓動は静まる術を見失ったようだ。祐子が襟を直し帯を締め直して部屋に入ると、賢は床の上に胡坐をかいて祐子の入って来るのを待っていた。

「御免なさい、わたし……」

そういいながら祐子は自分の床の上に賢に向かって座った。

「祐子、ノート隠したな」

「だって、賢くんがどこかに行ってしまうそうなんだもの。女郎蜘蛛に連れて行かれたと思ったの。このノートが怖いよ」

「ばかだな」

そう言うと賢は祐子に近づき抱きしめた。

翌朝、ふたりは6時前に起きた。賢は顔を洗う為に洗面所に立った。賢は祐子が下着を洗って、浴室の前のシンクのタオル掛けに干していたことに気付いた。「女性だな」と思った。

「着替えちゃおうか」

「うん」

ふたりは手際よく、着替えを済ませた。祐子はふたりの浴衣を片付け、賢は布団を片付けた。賢は先ず昨日預かったノートと書き掛けだった自分のノート、ペンをザックに収めた。

祐子にはまだ昨夜の余韻が残っていた。賢の姿を見て、顔が紅潮するのを覚えた。賢は座卓を少し内側に引き戻した。外はすっかり明るくなっていて、祐子の姿が美しく輝いていた。

「食事に行こう」

祐子が「うん」と言って立ち上がり、振り向いたとき、賢は祐子の左手を取っていきなり強く抱きしめ、口づけした。賢が祐子を離すと、祐子はふらふらとふらつきながら、テーブルの脇にしゃがみ込み、部屋の鍵を手にした。祐子はふと、「この人と永遠に一緒にいたい」と思った。ふたりが地下の菊の間に入ると既に食事の支度ができていた。およそ半数のテーブルが朝食の客で塞がっていた。まだ、食事に降りて来ていないグループもかなりあるようだ。日本の旅館特有の朝食だった。仲居がご飯と味噌汁を運んで来た。

「おはようございます！よくおやすみになれましたか？この干物は沼津の干物です」

そう言いながら、ふたりの前にご飯の茶碗と味噌汁の椀を置いた。

「おはようございます」

ふたりは同時に応えた。賢は祐子が食事をする姿をじっと見つめた。祐子も時々賢を窺いながら箸を進めた。食事を済ませて部屋に戻ると、既に布団が片付けられており、座卓が中央に戻されていた。ふたりのザックと雨具は元の位置にそのまま置かれていた。賢は畳の上に腰を下ろした。祐子も賢の左側に、賢に寄り添うように座った。

「今日は八丁池だな」

「ずっとここにいたいな」

祐子は賢の左腕に右肩をぶつけた。

「そういう訳にはいかないぞ。うーん、じゃあ時間一杯ここに居よう」

祐子は黙って頷いたが、一呼吸置いてから言った。

「やっぱり行く」

「よし、頑張ろう。今日はいい天気だぞ」

賢はそれを聞いて力強く応じた。ふたりは雨合羽とスパッツをザックに詰めた。賢はキーパッドで暗証番号を押し、金庫から祐子の財布と時計を取り出し、祐子にそれを渡した。

「賢くん、暗証番号覚えていたの？」

「あっ、いや、自然に押していたよ。キーを押すって意識してただけだ」

「えっ！」

賢は自分の財布を金庫から取り出し、ザックの中に放り込んだ。

宿泊費は賢がクレジットカードで支払った。伝票にサインをするとき、祐子が後ろから覗き込んでいた。伝票には「内観様御夫妻様ご宿泊精算書」と印刷されていた。祐子は顔が熱くなるのを覚えた。チェックアウトを済ませると、ふたりは売店でペットボトルの緑茶とおにぎり、板チョコ2枚を買った。賢はそれを全部自分のザックに詰め込んだ。

「誰にもお土産を買っちゃだめよ」

祐子が賢の耳元で言って、いたずらっぽく微笑んだ。フロントにあるソファで15分ほどバスを待って旅館を後にした。9時少し前だった。賢の言った通り、空は快晴で、雲一つ無かった。ふたりは下田方面行きのバスに乗った。地元の客が4、5人乗っているだけだった。ふたりは天城峠でバスを降りた。それからすぐ案内標識に従って急な階段を登り山道に入った。いきなり急な登りで祐子は初め目眩を覚えたが、少し立ち止まると落ち着いた。賢が祐子の手を引いて、ゆっくり登った。やがて、昨日来た旧天城トンネルの入り口付近に出た。ふたりは昨日と同じ茶屋跡の休憩所で少し休んだ。

「ああ、きつかった。きのうは怖かったわね」

「うん。今日は快晴だから、昨日のような雰囲気はないな。祐子、登れるか？」

「わたしは大丈夫、一緒だもの。賢くんこそ大丈夫？」

「俺は、いつでも自分に気のエネルギーを注入できるから平気さ」

ふたりはトンネルの横にある狭くてやや急峻な山道に入り、少しして勾配のある山道を15分ほど登って分岐点に出た。そこから八丁池方面への山道に入った。昨日の雨の影響はほとんどないようだったが、草木は滴を含んで生き生きしていた。祐子は次第に元気を取り戻し、必死に登った。賢が常に祐子を気遣っていた為、息が切れても苦にならなかった。賢は自分が先に立ち、安全を確認してから祐子を進ませた。足場の悪いところは、祐子の手を握って支え、祐子がそこをやり過ごすのを見守った。暫くはブナやクヌギ、クマザサの茂った雑木林の中を掻き分けるように進んだ。賢は極めて快調に登っていたが、祐子の息が上がってきているのに気付いた。少し行くと展望が開けた。

「休もう」

賢が言った。

「ああ疲れた」

ふたりはすぐにザックを下ろした。

「賢くんチョコレート」

と祐子が言った。賢が自分のザックから板チョコを1枚出して祐子に渡した。

「身体は疲れたけど、まだ心は夢心地、私の中にずっと賢君が居るみたい」

祐子は伏し目がちに板チョコの包みを剥き、それを二つに折り、そして

「はいっ」と言っで半分を賢に渡し、残りをかりっと囓った。賢は

「俺の心の中にも、いつも祐子が居るよ」

と言っで、チョコレートを丸ごと頬張った。祐子は心の中で、「ばかね」

と言っだが、言葉には出さず微笑んだだけだった。少し休んでから、賢は祐子の手を引いて立ち上がらせた。

「さあ、もうひと登りしよう、祐子、膝大丈夫か？」

「平気よ・・・この辺りかしら・・・慧生」

「えっ？」

「何でもない」

ふたりは、再び登り始めた。特に大きな景色の変化もなく、単調な山道が続いたが、30分ほどして、再び展望が開けた。そこからは暫く山肌に沿ったなだらかな勾配の山道が続いた。祐子には自然の中を歩いているという実感が漲ってきて、次第に息も整ってきた。祐子が後ろから言った。

「賢くん、わたし、この道通ったことがあるような気がする。子供の頃かな？でも、天城に来たことないはずなのにね」

「そういうの、よくあるんだ」

「その時も誰かと一緒だったような気がするの、誰か分からないけど」

「ふーん」

やがて、また雑木林に入った。今度の登りは勾配が急で、ふたりとも息が切れた。賢は危なそうなところでは必ず祐子の手を引いた。

「賢くんスタミナあるね」

「ああ、この程度じゃ大丈夫だよ」

「頼もしいな。わたし、安心」

祐子がいつも言う言葉だ。やがて雑木林も抜け、砂利道の車道に出た。車の通れる道であったが、誰一人通っている者もなかった。

「あと、30分くらいで着くよ」

祐子はかなり疲れていた。とうとう

「疲れたー！」

と言って、道路の中程にしゃがみ込んでしまった。賢は自分のザックを下ろし左手に持つと、しゃがみ込んでいる祐子の前に行き、

「おぶされ！」

と言って中腰になった。祐子は黙って、賢の背に身を任せ、首に抱きついた。賢は

「よし」

と言って立ち上がると一步一步、ゆっくり歩き始めた。勾配が急になると、少しペースを落とし、緩やかになると普通のペースに戻して歩いた。祐子の体は汗で湿って冷えていた。その冷たさが賢の背に伝わってきた。賢は祐子の腰の下で、右手で左手の手首を握り、左手にザックを持って祐子をおぶって歩いた。祐子の身体は柔らかかった。賢は「昨日は気付かなかったな」と、ふと思った。祐子の胸の柔らかな感触を背中に感じながら、踏ん張って歩いた。やがて、祐子が歌を口ずさみ始めた。「もしもあなたに、あわずにいたら、わたしはなにを、してたでしょうか……」

古い歌だが、賢もテレサテンの歌が好きだった。祐子が歌い終わる頃、流石に賢の歩みも遅くなってきた。祐子は「降りる」と言って賢の首に巻き付けていた手を緩めた。賢は中腰になり、そっと祐子の背後を支えていた手を外した。祐子は賢の背中を滑り降りると、賢が立ち上がるると同時に、抱き付いて右頬に口づけをし、

「すき」

と言った。賢は再び自分のザックを背負い、祐子の手を引いて歩いた。やがて車道から横に逸れる山道に入り、少しすると八丁池に着いた。透明で、静かに水を湛えた池だった。水面は周囲の森林と空を映して神秘的な雰囲気醸し出している。少し歩いてから、賢は池畔の丈の短い草むらの上にザックを下ろし、スパッツを取り出して草の上に敷いた。ふたりは寄り添うように、その上に腰を降ろした。

「賢くん、さっき休んだ場所で言い掛けたんだけど、心中した清朝最後の王妃の長女、愛親覚羅慧生あいしんかくらえいせいっていう女性のこと知っている？」

「知らない」

「20歳の学習院大学の学生の久保武道って人と、さっき通って来た御幸歩道という場所で心中したの。同じ大学の同級生の慧生はまだ19歳だったんだって。久保って人が潔癖主義で、お父さんが次々に恋人を作るのに悩んで自殺しようとしたらしいんだけど、慧生が同調して心中したんだって。初めは潔癖すぎるって諭していたんだけど、最後にはとうとう一緒に死んだんだって」

「詳しいんだな」

「天城のこと調べて来たのよ」

「若すぎたんだな。その大久保って人、一途だったんだな。でも、20歳まで生きて、心が純粋なまま死んだことは、ある意味ではよかったかも知れないな。ある意味ではまずかったと思うけど」

祐子には賢の言うことの意味がよく理解できなかった。

「わたし、もし、賢くんが大久保って人で、わたしが慧生だったら、賢くんと一緒に死ぬわ」

「祐子、たとえ純粋でも、思考に捕らわれちゃだめだ。大久保って人はお父さんを許せなかったんだらう。それか、そういう社会に失望したんだらう？それじゃだめだと思うよ」

「その人の考えたことはどうでもいいのよ。わたしはただ、賢くんが死ぬって決めたら、わたしも一緒に死ぬってことよ。慧生もきっとそう決めたんだと思うわ」

賢は両手で祐子の肩を抱いて、黙って額に口づけをした。

祐子は嬉しそうだった。先ほどこの池の畔に抜け出た道から青年男女の一団が姿を現した。12人ほどいる。彼らは口々に「こんにちは」と言っていて、ふたりの前を通り過ぎた。ふたりは、その都度、「こんにちは」と返事した。青年の一団が見えなくなった。12時を回っていた。祐子は賢のザックを広げ、握り飯とペットボトルの茶を取り出し、自分のザックから籐のバスケットを取り出して、その上に握り飯を置きながらぼつりと言った。

「わたしはね、この世界に生を持った証に、賢くんの子供を産むの」

祐子はそう言って賢の顔を覗き込み、顔を赤らめた。

「多分、もっとずっと先だ」

賢は頷きながら言った。

「気持ちいいね、空気が澄んでいて」

「一寸瞑想してみるか」

「うん」

ふたりは池の方を向いて15分ほど半眼で瞑想した。瞑想から醒めて、

にぎりめしを食べた。祐子の一つ、賢は二つ食べた。

「ここは場が澄んでいるな。あまり濁りがないような感じだ」

「わたしもそんな気がする。自殺があっても、執着が残っていないのね」

「うん、理解できるような気がするな。さっき瞑想したとき、初め一人の着物姿の美しい女性が池で何かを洗っている姿が見えてから、空中に大きな黒いうねりが現れ、そのうねりが7つに分かれて飛び散って、その後静寂が訪れて至福の感情に包まれたんだ。昔ここで何かあったのかな」

「それ、もしかしたら天城の天狗万三郎の妻じゃないかな。七つに分かれた黒いうねりは7頭の大蛇で、妻を守るため万三郎が退治したっていう民話があるのよ。切られた大蛇の首が、今の河津の7滝になったって話よ」

「ふうん」

八丁池からの帰りは、比較的なだらかな道を選んだ。賢は常に祐子の膝を気遣って、スローなペースで下った。祐子は体が楽になってきているのを覚えた。2時間ほどで、水生地下に繋がる砂利道に出た。賢は祐子の手を握って歩いた。祐子は時々鼻歌を歌った。途中山葵田の脇を通り抜けた。天気は快晴だが、日差しは暑くはなかった。水生地下ではそれほど待たずにバスが来た。

「一寸早いかも知れないけど、祐子、疲れているから帰ろう」

「うん」

「俺は部屋に帰って、今回の情報をまとめるよ」

帰りの特急電車に乗ると、車内は冷房が効いて、ひんやりしていた。ふたりはザックを降ろして足下に置き、座席を少し傾けた。祐子はザックから「伊豆の民話」を取り出し、賢の耳元で小さな声で囁いた。

「八丁池の話、読んであげる」

「それにあるのか？面白いな」

祐子は賢の右肩に自分の頭を預け、両手で伊豆の民話のページをゆっくり繰った。

「読むわね・・・ むかしむかし、伊豆の国に万太郎、万次郎、万三

郎という強い天狗の兄弟が住んでいた。三人は自分達の領分を決め、万太郎は達磨山に、万次郎は天城の万二郎岳に、万三郎は天城の万三郎岳に住んでいた。末の弟の領域には八丁池があるので、ふたりの兄は万三郎を羨ましく思っていた。あるとき万三郎の若く美しい妻が、八丁池に出て洗濯をしていた。池の水は透明で底を泳いでいる魚たちの姿までよく見えた。辺りはこの妻の立てる水しぶきの他、音を立てるものもなく、水面も空の青さと周りの木々の緑を映し、まるで鏡のようだった。すると、にわかには後ろのクマザサがざわざわしてきたかと思うと、その周りの木々が大きく揺れ始めた。万三郎の妻が驚いて振り返ると、ブナの木の大い幹を押し倒して頭が7つもある大蛇が、頭をもたげ目をぎらつかせながら這い出して来た。驚いた妻は恐れ慄いて、「万三郎、助けてくれー」と叫んだ。この声を聞いた万三郎は風のごとくそこに現れ、腰に付けた剣を引き抜き大蛇に斬りつけた。大蛇はそのきらきら光る万三郎の剣を恐れ少し怯んだ。万三郎は剣を大きく掲げ振り回した。天狗の万三郎は右に飛び、左に飛んで、大蛇の目を眩ませた。暫くの間、大蛇は7つの首をもたげて万三郎に挑みかかろうと隙を窺っていたが、万三郎の動きがあまりに敏速だったので、諦めて元来た森の中に……

・」  
祐子は息を少し深く吸うと、手にしていた小冊子を膝の上にぽとりと落とし、そのまま眠り込んでしまった。賢は自分の姿勢を変えず、そっと冊子を拾い窓の棧の上に置いた。左手でザックを開き、中からジャケットを取り出すとそれを広げ、祐子の右肩から左の胸にかけて静かに覆った。そして、そのままの形を保って背もたれに体を委ねた。祐子は寝顔も美しかった。頬が透き通っているような印象を受け、天城に咲くシャクナゲの色を思い起こした。賢もそのまま眠りに落ちた。横浜駅の手前でふたりは同時に目を覚ました。列車が急停車したようだった。周りの乗客がざわついている。暫くして、赤信号の為の停車だという車内放送があった。

「何かあったんじゃない」

中年の女性客の声がした。祐子は自分に掛けてある賢のジャケット

を見てそっと外し、それを畳んで賢に渡した。

「ありがとう。わたし、寝ちゃった」

「俺もさ」

祐子は少し辺りを見回して、小冊子が窓の棧に置いてあることに気付  
付き、賢の顔を見て微笑んだ。それを手にすると、

「何処まで読んだんだっけ？えーと」

と言いながら、再び賢の肩に頭をもたれ掛け、ページを繰った。

「大蛇が逃げてゆくところさ」

祐子は小さな声で読み始めた。

「万三郎はこの大蛇が執念深いことをふたりの兄から聞いて知って  
いた。きっとまた妻を求めてやってくるだろうと考えた。万三郎は  
直ぐに兄の万次郎のところに相談に行った。ふたりは策を巡らせ、  
大蛇に立ち向かおうということになった。まず、八丁池の畔、妻が  
洗濯をしていた場所に樽を7つ並べ、その樽に強い酒をなみなみと  
満たしておいた。案の定、大蛇はこの前と同じようにブナの2本の  
木を大きく曲げて、その間から7つの頭を四方に振り巡らせながら  
現れた。大蛇は妻の姿を探したが、見えない為、勢い池に近付いた。  
すると草陰からよい香りがする。頭を近づけると樽があることに気  
付いた。一つの首が真ん中の樽の酒を舐めた。甘く口当たりがよか  
ったので、残りの首もそれぞれ一つずつ樽に頭を突っ込み、酒を飲  
み始めた。飲めば飲むほど心地よくなるので、大蛇はどうとう全部  
飲み干してしまった。すっかり酔いの回った大蛇が、いよいよ妻を  
探そうと大きな体をくねらせて這い回り始めたとき、万次郎、万三  
郎のふたりの天狗が躍り出て、剣を持って大蛇に立ち向かい、大蛇  
の首をことごとく刎ねてしまった。八丁池の水は大蛇の血が流れ込  
んで真っ赤になり、そこに住んでいた白い腹のいもりは腹が赤くな  
ってしまった。切り落とされた大蛇の首は空高く投げ出され、河津  
川に落ちて7つの滝たるになった。人々はそれを7滝と呼ぶようになった。  
おしまい」

賢は祐子の顔を見つめた。微笑んでいる顔にはあどけなさが残って

いて可愛かった。賢も微笑んだ。祐子は小冊子を閉じるとそれを自分のザックに収めた。やがて、電車は東京駅に着いた。祐子は誰かに見られていないか気になり、辺りをきょろきょろ見回しながら電車から降りた。ふたりは途中コンビニに寄り、夕飯用に一つずつ弁当を買った。ふたりとも疲れていた。ふたりが祐子のアパートに着いたのは5時半頃であった。

「今日、資料をまとめるの？」

「うん、まだ感覚が新鮮な内に書き付けておきたいんだ。じゃ、ゆっくり休めよ」

「ありがとう」

祐子はそう言うと、賢が帰って行く後ろ姿に小さな声で、  
「愛してる」

と言った。賢は振り向かずに自分のアパートに向かった。部屋に入ると、賢はザックを投げ出し、そのまますぐシャワーを浴びて下着と服を着替え、ザックから2冊のノートを取り出した。記録用のノートには細かい字でかなり書き込んである。八丁池に山行した時の自分と祐子の意識、感情の動きと、周りの状況を思い出しながら、書き殴っていった。時々、ふとペンを休めては祐子の姿を思い描いた。しかし、祐子と過ごした夜のことはノートには一切書き込まなかった。時間は9時を回っていた。賢は記録用ノートを閉じると書棚に立て掛け、もう一冊のノートを手にしてベッドに身を投げ出し、それを開いた。そこに書かれている「おもいで」という言葉をじっと注視した。「あのとき現れた女性の過去のおもいでなのだろうか？」と思った。「彼女は何故あそこで消え、昨日自分の前に姿を見せたのだろうか？このノートを何故自分によこしたのだろうか？あの詩のような文章は何を意味しているのだろうか？」全く分からなかった。初めの詩の一節を読み返してみた。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た、  
街の冷たい水のしたたりが、

私の魂を凍らせてゆく  
空は青、大地は緑に、血の色は赤、  
水は透き通って、  
それでも、私の中を巡る

「心が凍ってゆくってことかな？何か絶望的なことが起きたということかな？」目を閉じて、あの女性の顔を思い浮かべた。改めて今思い出すとその顔は透き通るようで美しかったが、愁いに満ちていることに気付いた。

その時、入り口をノックする音がした。賢はノートを閉じ、ドアのところに行って鍵を開けた。祐子が大きめのバッグを持って立っていた。襟の大きく開いた赤いワンピースに着替えていた。

「来ちゃった」

「どうした？まあ、上がれよ」

賢はそう言うと、下駄箱を開けて白いスリッパを出し、祐子の前に置いた。そして、再びドアを締めて鍵を掛けた。

「今、まとめが終わったところだ。疲れているんだから、ゆっくり休めばいいのに」

「どうしよう。わたし」

そう言うと祐子はバッグを放り出して賢に抱きついた。賢は祐子の身体をそっと受け止めてから、静かに離そうとしたが、祐子は再び賢にしがみ付いた。賢はそのまま、軽く祐子を抱きしめて言った。

「祐子、疲れているんだよ。さあ、深く息を吸って、今日の青い空と八丁池の澄んだ水を思い浮かべて。それから、体の中のものを全部はき出すつもりで思い切り息を吐いて」

祐子は言われた通り深呼吸をして、八丁池を思い描こうとしたが、  
「だめ、体が熱くて、頭の中があなたで一杯なの、打ち消そうとすればするほど、体が熱くなるの。今日、ここに泊まっていっていいでしょ、ねっ！」

賢は俺の所為だと思った。どうかしなくては祐子がおかしくなってしまうと思った。

「分かった。食事はしたのか？」

「まだ。欲しくないの」

「今日は疲れているし、明日仕事もあるから、早く休もう」

「一緒に寝てくれる？」

「うん、だけど今日だけだぞ。朝まで寝るだけだ、いいな」

「わたしいいの、賢くんと一緒にいられば。今日は絶対離れたくないの。わたし、ここから会社行くわ」

時計は11時を少し回ったところだった。そのときスマホの鳴る音がした。祐子は自分のバッグからスマホを取り出した。

「もしもし、あら亮子、どうしたの、こんな時間に？……うん……うん……えっ……うん、わかった。じゃあ、明日の昼に私の事務所に来て。じゃあね」

賢はよかったと思った。祐子が感情に突き動かされた状態から平常に戻ったと思った。そして、そう思うことに逆に少し抵抗を覚えた。

「祐子、疲れているだろうからシャワーを浴びた方がいい」

「うん」

祐子はバッグから下着を取り出して、浴室に向かった。

賢は「女性は用意がいい」と感心した。祐子はシャワーを浴びると、タオルを身体に巻きつけたまま部屋に戻って来て言った。

「賢くんもシャワー浴びてきたら？」

「さっき浴びたけど、熱いからもう一度浴びるよ」

ベッドは賢が既に新しいシーツでメイキングしてあった。賢はすぐに浴室に入り、10分ほどで出てきた。簡単にタオルで身体を拭くと部屋に入った。

「そうか、祐子、パジャマが無かったな」

「賢くん知っている、遠野物語拾遺に東北地方のある地域では、愛し合うふたりは裸で寝なくてはいけないという風習があるって書いてあるのよ」

「おい、俺、我慢できないぞ」

「今日は無理よ。私がだめなもの」

ふたりは、ベッドに入った。

「私たち、夫婦みたいね」

「いや、恋人同士さ。夫婦になると現実的になってしまう」

「賢くん、私を捨てないでね」

「兎角、心は彷徨うものだ。もし、俺の心がおまえから離れるようなことになったら、まずそれはあり得ないけど、その時は真実の俺を求めて、迷妄に彷徨う俺を殺してくれ。この指輪に向って「死ね」と言えば、この現象界の俺はその場で絶命する。アリゾナに居たときに師匠から教わって俺の命の鍵を封じ込めた指輪だ。これを祐子に渡しておくよ」

賢はそう言って右の拳を広げ、ターコワイズの指輪を祐子に渡した。銀のリングにスカイブルーの石をあしらった男性的な力強さを感じる指輪だ。祐子は指輪を受け取ると直ぐに左手の薬指に差し込んだ。指輪はぴったり填まった。祐子は賢の顔をじっと見詰めた。賢が事前にサイズを調整してあったようだ。

「あなたの命の指輪・・・大切にするわ。だけど、どんなことがあっても賢くん「死ね」なんて言わない。賢くん、意識はいつもわたしと一緒に居て。わたしは、いつも、あなたを求めるわ。そのときはできるだけ優しくしてね。わたしは、もしあなたがいなくなったら、きっと生きていないわ。今日は私を抱き締めて寝て、お願い！」

「そんなことして、お前眠れるか？」

ふたりは向き合い、賢は祐子の背に手を廻して抱き締めた。祐子は「ふっ」と息を吐いて、賢の背中を抱き締めた。ふたりは暫くそうしていたが、やがて同時に眠りに落ちた。翌朝、賢が目を覚ましたとき、祐子は賢の胸の中に顔を埋めたまま、まだ眠っていた。賢は祐子の額に軽く口づけした。祐子は目を覚まし、賢の頭を強く抱きしめた。ふたりは起きあがった。

「おはよう」

ぴたりと呼吸が合った。暫くして、祐子はベッドから静かに出て、浴室に向かった。祐子がベッドに戻ると、ふたりは直ぐ通勤の支度に着替え、昨日の弁当を食べた。

「賢くん、私が出る時、周りを見て誰もいないこと確かめてね」  
初めに賢が出て、賢の合図で祐子が恐る恐る外に出た。ふたりは駅まで一緒に歩いた。駅はいつもの通り、通勤客で混んでいた。ふたりはそこで別れた。賢は会社に着くとメールの処理を行い、朝礼が終わってから退社の手続きを始めた。リストラ実施の直前であった為、辞表はすぐに受理された。7月の末に退社することが決まった。残された日々は業務の引き継ぎと資料の整理に充てることにした。賢は今の仕事に満足していた。職場の仲間との関係も、家族的で大きな歪みはなかった。賢の部は男性10人、女性7人の構成だった。賢は課長職扱いの主任だった。職場には「先輩、先輩」と賢を慕う入社3年目の櫛田という元気な好青年がいた。朝礼が終わった後、賢の席に来た。

「先輩、会社辞めるんですか？」

「うん、一寸やりたいことがあってな」

「起業するんですか？」

「いや、まだ決めていない」

「じゃ、送別会をしなくちゃあ」

「ありがとう」

その日は退社の手続きで一日中仕事に手が付かなかった。いつも通り5時半に会社を出た。駅に向かって歩いていると後から櫛田が追って来た。

「先輩、今日一寸相談したいことがあるんですが、付き合ってくださいませんか？」

「うん、一寸なら」

ふたりは近くにあるスナックに入った。若いふたり連れの女性客がいるだけだった。ふたりはカウンター席に着いた。

「いらっしやいませ」

「コーヒー2つ」

賢は櫛田に確認もせずに注文した。

「かしこまりました」

櫛田が切り出した。

「先輩、実は俺、会社を辞めようかどうか迷っているんです。今朝、先輩が会社辞めるって言ってたんで、俺も、と……」

「おい、俺の影響か？」

「いいえ、実は実家から帰って来いって責められているんです。家の仕事を継げって」

「おまえの実家何処だっけ？」

「仙台です。家が家具屋をやっているんです。長男の俺が東京に出てしまった上に、妹も「そういう風に縛られるのはいやだ」と言っているもんだから、親父が怒っていて、それで、もう一度考え直してもいいかなって思っているんです。先輩どう思います？」

「家具屋の仕事うまくいっているのか？」

「震災から復興してから、地元じゃ、1、2を争う有名な家具屋になったんですけど。最近は店を開いていても来る客が減って、むしろネットでの販売の方が伸びてきているらしいんです。売り上げは横這いで、利益は下がってきているみたいです。まだ、赤字にはなっていないんですけど」

「それで、おまえ、どう考えているんだ」

「いま、悩んでいるんです」

「もし、俺がおまえの立場なら、まず、関係する人たちの現状を冷静に認識し、自分の退社で迷惑を被る人がいないかどうか確かめる。もしいたら、その問題を先に解決して、それからそれらをすべて忘れて、人には相談せず、今自分がどうしたいかだけに集中し、自然な判断に従うと思うけどな」

「俺、皆のこと考えると、つい皆の考えに基づいて判断してしまいます。まず皆が一番いいと思うようにと考えて、その後で自分の一番いいと思う方向にしようと思うと、もうほとんど選択の余地がな

くなくなってしまって、自主的な判断ができなくなっちゃうんです」

「それなら、考えることを辞めたらどうだ。楽になるぞ」

「そうしたら、判断なんてできませんよ。でも、先輩の言ったこと、あとで一寸挑戦してみます。ところで先輩、最近何かいいこと有ったんですか？先輩が普段より生き生きしているように見えます」

「うん、いろいろな」

「彼女ができたとか？」

「想像に任せるけど、特に生きた自然に接した所為じゃないかな」

「俺、彼女欲しいな。先輩、今度誰か紹介してくださいよ」

ふたりは店を出て、いつもの地下鉄の駅に入ろうとした。

「賢くん！」

後ろから、祐子の声がした。

「祐子、どうしてここにいるんだ？」

「偶然よ。一緒に帰りましょう」

「あっそうだ、俺の同僚を紹介するよ。櫛田君だ。うちの会社のホープだよ」

「初めまして櫛田雄三です」

櫛田は少し緊張して、ぎこちなく頭を下げた。

「崎野祐子と申します」

賢と祐子はここで櫛田と分かれた。櫛田は祐子の美しさに打たれ、心臓の鼓動が激しくなった。賢がふたり分の切符を買う姿を、うっとりと見つめながら待っている祐子の姿に、何度も振り返りながら改札を入れて行った。櫛田の乗車方向はふたりと逆方向だった。切符を買うと、賢は1枚を祐子に渡し、祐子に続いて改札を入った。

「何か用事があったのか？」

「待っていたの」

「食事でもしていくか」

「うれしい！」

「今日ね、昼休みに亮子と会ったの。彼女、体の具合が悪いんだって。それで、担当医から、入院して治療するように薦められている

らしいの。わたしに相談に来たのよ。ご両親には言いたくないんだって」

「何処が悪いんだ」

「子宮筋腫なんだって。最悪、子宮の摘出手術になっちゃう可能性もあるんだって。それで悩んでいるのよ。でも、まだ可能性はあるらしいの。最近、手術しなくても超音波治療とかいう方法で、筋腫の部分を切り離すことができるらしいの。でも国内じゃできないらしいし、お金が掛かるのよね」

「そうか、それは大変だな。祐子、亮子さんの写真か、身に付けていたもの持ってないか？」

「どうして？ 写真なら、アパートに帰ればあるけど」

「可能なところまでやってみようかと思ってさ」

「どうするの」

「歪みの補正と、エネルギーの注入さ」

「へえー、賢くん何でもできるのね」

「いや、俺のやれることをやってみるだけさ。亮子さんは直りたいんだろう」

「当たり前よ！」

「分かった。後で、祐子のとこ寄っていくよ。ところで、今日はピザなんかどうかな？」

「うん、いいわ。わたし、ピザのおいしい店知ってる。そこ行かない？」

「いいよ。任せるよ」

ふたりは赤坂見附の駅で降り、裏道をイタリアンレストランに向かった。祐子は賢の左手に自分の右手を絡めて歩いた。ふと、その時一人のジーパンにアロハシャツを着た30歳前後の男が反対側を歩いて来ていきなりふたりの前を横切り、賢の右肩にぶつかった。

「おい、てめー、いてーじゃねえか。馬鹿野郎、いちゃいちゃしやがって」

男は賢に罵声を浴びせた。賢は少し振り向いたが、そのまま通り過

ぎようとした。

「てめー、人にぶつかっというそのまま逃げるつもりか？あやまれ！」

祐子は賢にしがみ付いたが、賢は右手で祐子を押し離しながら言った。

「離れて」

賢は男の方をゆっくり、自然な形で向いた。ただ振り向いただけという感じだった。

「このやろー、舐めやがって」

男は拳を握り、いきなり賢の顔面目掛けて殴りかかった。賢はすりと避けた。その動きは、ほとんど目に止まらない素早さだった。向きを変えると、男はまた殴りかかってきた。賢はまたすりと避けた。

「この野郎、ただじゃすませねー」

そう言うと、男は右ポケットから錐のようなものを取り出し、賢に向けて突っかかってきた。咄嗟に賢はその男の右手首を捕らえた。賢は力を入れて男の手首を握った。

「いてててて・・・」

男は錐を落とした。賢はその男の手を離した。男は急いで錐を拾うと、それを持って駅の方角に走り去った。辺りには人だかりが出来ていた。賢は何事もなかったかのように、祐子の方に向かって歩き始めた。祐子はあっけにとられていた。見ていた人たちも何となく拍子抜けして散って行った。

「賢くん、大丈夫、怪我はなかった？」

「大丈夫だ」

「でも、すごいわね、賢くん！あの避け方」

「ああ、俺、以前少林寺拳法を習ったことがあるんだ」

「でも、やっつけちゃえばよかったのに」

「いや、あいつ、俺たちの何かが気に入らなかったんだろう。だからさ、戦う理由ないよ」

「ふうん」

祐子は再び賢の左手を抱え込んだ。少ししてふたりはイタリアンレストランに入った。やや、薄暗い感じのするレストランだった。チーズを焼く独特の匂いが漂っている。ふたりは壁際の席に案内された。壁にはイタリアの海の写真が何枚か貼ってあった。首からエプロンを掛けた若いウエイターが注文を取りに来た。祐子が賢に確認してからシーフードピザとサラダ、そして白のハウスワインを頼んだ。ハウスワインとは謂っても、この店で選んだワインという意味のようだ。

「祐子、夕食はここのところずっとおまえと一緒にだな」

「だけど、まだ4日よ」

ウエイターが白ワインのグラスを2つ持って来た。

「何時までも一緒にいられるように、乾杯！」

「祐子に乾杯！」

ふたりは暫くの間、お互いの目を見つめ合っていた。

「今日、正式に辞表を出して受理された。今月一杯で辞めることになったよ」

「旅行、行くんでしょ」

「祐子には予定を全部話すよ」

「わたしも、一緒に行きたい」

「結構ハードな旅行になるんだ。祐子にはいつも連絡するようにするよ」

「・・・・わたしも行けたらいいのに・・・・」

「ところで、この間の大山の失踪者のことだけど、彼は水泳の選手だったよな」

「ええ、確かそうだったわ」

「何処の出身なんだろう」

「三重県だってことよ」

「三重県の水泳の選手が、晩秋に大山の山中で光とともに消える。全く分からない。それと、海の老人」

「賢くんが消えたとき、隅田川の川岸で変な老人に会ったって話したでしょ。何か関係ないかな？」

「うん、何とも言えないな。あの人、この辺りの人じゃないのかな。この間の鷹狩りの時も来ていたし」

「そうね、出雲大社とはどうも、結びつかないわね。いやだ、また、特捜班になってる」

「やはり専門店のピザはいつものファミレスとは一味違う。この人と一緒だからかな？」

と祐子は思った。

食事が済むとふたりはぶらぶらと永田町駅まで歩いた。そこから半蔵門線に乗り、九段下で東西線に乗り換えて門前仲町駅に着いた。陽が沈みかかり、辺りがオレンジ色に染まりはじめていた。やがて、ふたりは祐子のアパートに着いた。祐子はアパートの入り口の鍵を開けると、

「入って」

と言いながら、自分が先に上がった。

「今日は止めとくよ。亮子さんの写真だけ貸してくれよ」

「だめ、上がって」

賢は仕方なく上がろうとした。祐子はさりげなくスリッパを賢の足元に揃えた。

「どうぞ」

賢が中に入ると、祐子は扉の鍵を閉めた。部屋はきちんと片付いていた。祐子は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、グラスに注ぎ、アイスボックスから氷を掬ってその中に落とし、テーブルの上に置いた。

「さあ、コーヒーどうぞ」

「ありがとう。祐子、もうアルコールは醒めているな。おまえとふたりの方が効果があるかも知れない。一緒に亮子の為に祈ろう。俺の言う通りにしてくれ、いいな。とりあえず写真を持って来て」

祐子はライティングテーブルの引き出しを開け、そこから3枚の写

真を持って来た。

「3枚あるわ」

賢はその内、亮子が一人だけで正面を向いて写っている写真を取り、あとは祐子に返した。賢には写真の亮子の姿が健康そうに見えた。

「先ず、水を飲もう。そして、完全に酔いから醒めないよ」

ふたりはペットボトルのミネラルウォーターをコップに2杯ずつ飲んだ。賢はさっき選んだ写真を自分の座っているディナーテーブルの上に置いた。

「祐子、こっちに来て俺の横に座って」

祐子は賢の隣の席に移って座った。

「まず、腹式呼吸をして呼吸を整え、暫く心を空しくする。できる限りな。そして、写真を見ながら亮子の姿をイメージする。次に亮子の子宮を思い浮かべる、想像でいいから。そしてその横に出来ている子宮筋腫も思い浮かべる、できるだけ自然に。それから、その子宮筋腫が消えてゆく様子をできるだけリアルに想像し、瞑想に入りながら心の中で、「消える、消える」と繰り返す。これを10分ぐらい続けよう。ちょっと分かりにくいから瞑想状態に入るとき俺が最初に「消える、消える」と2回言うから、それに調子を合わせて心の中で300回消えると言ったら目を開こう、いいね」

「わかったわ」

ふたりは賢の説明の通り瞑想を行った。瞑想を終えると賢が

「ありがとうございました」

と言った。祐子も

「ありがとうございました」

と繰り返した。賢は祐子に亮子の写真を渡しながら言った。

「このことは亮子にも、誰にも言ってはいけないよ。それから、亮子にはこれからずっと丹田呼吸をするように伝えてくれ。呼吸は全て丹田呼吸。下腹の皮と背中がくっつくようにイメージしてお腹の空気を思い切り吐き出して、吸うときは凹んだ下腹に自然に空気が入ってくると想像して下腹を思い切り膨らませるように吸う。

これを繰り返すんだ。最初は大変だけど、途中で諦めないでずっとそれを続けるようにな」

「うん、分かったわ」

「じゃあ、俺、帰るよ」

「だめ、もう少し居て。だって、あの事件のことを検討しなくちゃ」  
そう言うと、祐子はテーブルの引き出しに亮子の写真を戻しながら呟くように言った。

「賢くん、今夜も一緒に居たい」

「祐子、俺だって一緒に居たいさ。だけどそうしたら、もう俺たち離れられなくなっちゃうぞ」

祐子は引き出しを閉めずに、手を掛けたままでいた。

「わたし、苦しいの。あなたと一緒に居ないとだめなの。お願いだから、今日も一緒に居て」

「祐子、このアパートの合鍵持っていないか？」

「あるけど、どうして？」

「俺に1日貸してくれないか？そうしたら、今日はここに居るよ」

「そうだ、何故気がつかなかったのかしら、一寸待っていて」

祐子はパタッとテーブルの引き出しを押して閉め、ライティングデスクの処に行って、引き出しから合鍵を出して来て賢に渡した。

「この鍵ずっと持っていて。いつでもここに来て。わたしシャワーを浴びて来る」

祐子は着替えを持ってバスルームに向かった。祐子のアパートのバスルームは、浴槽と便器のある部屋と、洗濯もできる化粧室とが分かれていて、そこで脱衣ができるようになっていた。祐子はシャワーを浴びると、パジャマに着替えて出て来て、そのままベッドにどっど身を投げた。

「賢くん、汗流すといいわよ」

「うん・・・」

賢は簡単にシャワーを浴びると、腰にタオルを巻きつけたまま戻って来てベッドに上がった。ふたりは口づけを交わすと、激しく求め

合った。

「大好き」

「祐子、俺たち、情愛の部屋に幽閉されてしまったみたいだな。暫くはここから出て行けそうもない」

「わたし、知らないうちに、おとといのあの一体感と恍惚感を求めてしまうの」

「祐子、おれはもっと広大な愛の世界に入ってゆきたい。すべての存在を愛せるようになりたい」

「わたしはあなただけでいいわ。あなたといつでも一つでいたい」

「俺たちいつか、肉体を超えて融合することができるようになるといいな。それは肉体の結合から入るのがもっとも近道のように見えるけど、だけど快樂だけじゃだめだ。それを超えたところに海のように大きな喜びにあふれた愛の世界があると思うんだ。またいつかふたりで挑んでみよう。俺がこれを実現できる相手は祐子しかいないから」